

夕力八劇団第十七回公演

『美談殺人』

脚本..高羽彩

〈登場人物〉

宗輔……歌舞伎町に住み着く青年浮浪者

三好……当代一の美談作家

閣下／竹田秘書官……歌舞伎町の浮浪者

たちのまとめ役。宗輔の面倒を見ている。

／三好に仕事を依頼している総理秘書官。

岡本……三好の書生。

マル……宗輔の妹で常に宗輔と行動を共

にする。喋れず手話を使ってコミュニケ

ーションを取る。

少し先の未来。

ゴミの山である。

どこまでも続くゴミの地平。

なかでも古本古新聞古雑誌の類いがうずたかく積みれ、さながら本の墓場のようなものである。

書籍類以外にも、ベンチやテーブル、ネオン看板などの粗大ゴミも僅かに散見される。

どこもかしこも煤け、世界はくすんで見える。

低くうなるような風の音。それはどこか飛行機のエンジン音のようで、舞台上を不穏な空気で満たしていく。

暗転。

○プロローグ…美談ショップ

低い風の音に混じって、放送電波が混線したような音が聞こえてくる。

舞台奥に上品な夫婦が並んで座る姿が浮かび上がる。

夫婦は、一点を注視している。

夫妻はモニターを見ているようで、彼らの体にはモニターのハレーションが点滅している。

傍らには美談コディネーターが立っている。

舞台中央にマルが現れると、舞台の焦点はマルへ。

マル、きわめて形式的に礼をすると、手話ニュースが始まる。(混線電波が手話ニュースに切り替わる)

マルはニュースを手話通訳する。

以降マルは、舞台上で起こる全ての事を手話通訳する。

手話ニュース

「こんばんは。8時のニュースです。日本人の平均寿命が、また低下しました。総務省の発表によりますと、2020年代から低下し、続いている日本人の平均寿命が、今年の統計ではさらに下がって、49.8歳になったということです。3年後には47歳を下回る見込みです。専門家によりますと、日本人の短命化による経済活動の停滞が貧困層と富裕層の格差を生み、短命化にさらなる拍車をかけているとのこと。それを受け、より身近になった死を華やかに演出したい、という需要が高まり、人の死に様をコディネートする美談産業が好調です」

そこは美談ショップ。
店内には安っぽいヒーリングミュージックが流れている。

柿丸「やっぱり、けっこうかかるんですね」

高羽「……そうなんですよ」

福本「600万……」

高羽「そうですね、基本のコースですと、はい。もう少しリーズナブルなものもございますよ？」

福本「俺たちの結婚式より高いよ」

柿丸「まあねえ……」

高羽「結婚式、どちらでやられたんですか？」

福本「あー……」

柿丸「目白の」

高羽「椿山荘ですか？」

柿丸「そうです」

高羽「素敵な会場ですよ。私の友人の結婚式も椿山荘で」

柿丸「そうなんですか」

高羽「6月だったので蛍なんかもいて」

柿丸「そうなんですよ。あそこのお庭、蛍が自生してるから」

高羽「素敵でした」

柿丸「私たちの頃は今よりずっと治安も良くて」

高羽「そうですね！」

柿丸「今より静かで、環境も良くて……。私たちにはちよつと贅沢な会場かなって思ったんですけど」

高羽「一生に一度の事ですから」

柿丸「ええ」

高羽「こうやっていい思い出になってらっしゃるんですから、贅沢だななんて事は」

柿丸「そうですね」

高羽「……一生に一度、という事で言えば、こちらも一生に一度の大切なイベントですから」

柿丸「そうですね」

福本「うーん……」

高羽「お二人はこういったお店にいらっしゃるのは……？」

柿丸「初めてで」

高羽 「さようでございますか。旦那様の余命の方はもう……?」

柿丸 「ええ……。この間の余命診断で、だいたいあと……1年から3年
だって結果が出て」

福本 「……」

高羽 「さようでございますか……」

柿丸 「最近ね、余命診断の精度もすごく上がってるんでしよう? す
ごく正確だって。お医者様にも太鼓判押されちゃったわよね。絶
対死にますって」

高羽 「1年から3年という事になりますと、やはりそろそろ美談の購入
をご検討いただく時期かと」

柿丸 「そうですね」

高羽 「では大まかな流れをご説明させていただきますね。そのほうが何
かとイメージがつきやすいと思いますので。まずわたくし、美談
コーディネーターの方で旦那様のご希望をお伺いします。旦那様
の生涯を彩る理想の死に様をお伺いしまして、それをふまえた上
でわたくしどもの方から大まかなプランをご提案させていただきます
ます。そちらでご納得戴きましたら、美談作家の先生、キャスト・
スタッフを選定し、見積もりをお出しいたします。見積もり内容
にご納得戴きましたら、わたくし、作家、スタッフとお客様でお
打ち合わせの上。作家先生に美談の脚本を執筆戴き、以降は美談
の実行に向けて具体的な準備を進めて戴く形になります。命日当
日にはになりましたら、作成しました美談の通りにキャスト・スタ
ッフが段取りいたしましたして、お客様に最期の時を迎えて戴く形に
なります。あれですね、あれをイメージして頂くとわかりやすい
かと思います。すごく豪華な、フラッシュモブ」

柿丸 「フラッシュモブ! ねえあなた、私にプロポーズしたときもね
え?」

福本 「ああ……そうだったな……」

高羽 「まあ素敵! それじゃあ旦那様の死に様もきつと素晴らしいもの
になりますね!」

福本 「楽しみです」

柿丸 「あの、美談作家の先生はどういう方が?」

高羽 「わたくしども美談コーディネーターと業務提携をしている作家先
生の中からお選び戴く形になります。どの方も大変素晴らしい才
能をお持ちの先生ですよ。実績もありますし、ご遺族様のレビュ
ーも星4・5以上をキープされている方ばかりです」

柿丸 「あの、あの先生にはお願いできますか?」

福本「いいよおまえ」

柿丸「いいじゃない貴方、聞くだけ。貴方、あの先生の美談で死ぬのが夢だって」

福本「まあそうだけど……」

柿丸「聞くだけはタダなんだから。ねえ」

高羽「遠慮無くおっしゃってください」

福本「あの、三好瞳子先生に美談の執筆をお願いするってのは可能なんですか」

高羽「ああ……。三好先生……。素晴らしい美談作家の先生でらっしゃいますよね」

柿丸「この人三好先生のファンで」

福本「ドラマチックで、品もあって」

柿丸「三好先生に美談を書いて頂くと、遺族の生涯年収が2000万円もアップするって。孫の就職にも有利になるんでしょう？」

高羽「ええ、三好先生に美談をご執筆頂くのは非常に名誉な事ですから……。ただ、その分いくつかハードルが」

福本「はい」

高羽「ひとつは費用面」

福本「そうですよね」

高羽「三好先生は大変著名な美談作家の先生でらっしゃいますから、原稿料もそれなりに」

柿丸「ちなみにおいくらなんですか？」

高羽「四百字詰め原稿用紙一枚に付き……。百万は下らないかと」

柿丸「百……」

高羽「コネクションの問題もあります。三好先生は基本的にはご紹介のみ執筆依頼をお受けする方でして、そちらのネゴシエーションにも別途費用がかかります」

福本「……」

高羽「時間の問題もあります。三好先生は大変人気の先生でらっしゃいますから、美談の執筆は順番待ちでして……。いざ依頼が出来たとしても、その順番を待っている間にお客様がお亡くなりになる場合も……」

福本「ああ……」

高羽「中には妊娠中のお子様の美談をご予約される方もいらっしゃるくらいで……。いかがなさいますか」

柿丸「あなたはどうする？」

福本「いえ……。いえ、大丈夫です。ダメ元で聞いただけなので。提携の作家さんで充分です」

高羽「ではまず、お見積もりを出させて戴きますね。命日はいつになりますか？」

福本「ええと……」

高羽「いま診断されている余命ですと、1年から3年の範囲内という事になるとは思うんですが……」

福本「はあ」

柿丸「そしたらやっぱり3年後が、ねえ？」

高羽「ただどうしても余命は個人によつてばらつきがありますので、余りギリギリを責めてしまうと、お客様が予定日より先にお亡くなりになる可能性も……」

福本「ああ……」

柿丸「貴方どうする？ 3年生きられるかもしれないけど……」

福本「予定日より前に死んでしまった場合、キャンセル料って……」

高羽「大変申し訳ないのですが、予定日以前に亡くなられた場合は100%、費用をご負担戴く事になります」

福本「皆さんどうされてるんですか？」

高羽「やはり、最短スケジュールで命日を決められる方が多いですね」

柿丸「……一年後にしよつか？ ね？」

福本「えっ……」

柿丸「せっかくだから」

福本「そうだね……」

浮浪者Aが現れ、ゴミをあさり始める。

福本、柿丸、高羽も、足元のぼろを纏い、浮浪者B、C、Dとなつてゴミをあさりはじめる。(浮浪者Bは先んじてはける)

ゴミを漁りながら、椅子を片付ける。

浮浪者たち、めあてのものが見つからないようで、ゴミを

拾つては投げ、拾つては投げする。

浮浪者A、本を一冊拾つて天にかざし、最初のページから最後のページまでパラパラパラとめくってみせる。

浮浪者A、ぼろを脱ぎ捨てると宗輔となる。

○1、歌舞伎町

新宿歌舞伎町。

宗輔、かざしていた本を投げ捨てる。

宗輔「クソ！……おい、マル。マル！」

マル「(わたし?)」

宗輔「そうだよ、お前だよ。なに一人でポーツとしてんだよ。お前も手
伝えって」

マル、ちょこちょこと宗輔のもとへ。

宗輔「(浮浪者たちに) おい！ そっちはどうだ！」

浮浪者たちそれぞれに「収穫無し」とリアクション。

宗輔「ちゃんとよく見たか？ (本を適当に見回して) こうじゃねえぞ？

(丁寧にページをめくって) こうだ！ ちゃんと隅々まで見て、金
が挟まってないか探せ」

浮浪者たち、その辺に落ちている古本や古雑誌をめくって
みせる。

宗輔、その間に

宗輔「ほら、マル、お前もだ。いいか？ ゴミあさりってのは生半可に
やったってつとまらねえ。最近の歌舞伎町じゃあ、特に、だ。ち
よっと前までは、鼻くそほじりながらも、残飯やら電化製品や
ら鉄くず、金になりそうなもんが拾えたけどな。今は違う。金目
のものは拾い尽くしちゃった。その上、金目のものを捨てる奴が
いなくなった。残ってるのは古本古新聞古雑誌。喰えもしなきゃ
金にもならないゴミ。ただ、その中にたまに隠れてるんだ。忘れ
られたお年玉。夫に隠して貯めたへそくりが。(マルに) ほら、
探せ探せ(浮浪者たちに) 絶対に見落とすなよ！」

宗輔、マル、浮浪者たち、一生懸命本をめくる。

宗輔、浮浪者たちに的確な指示を出しながら、自分も本を
めくる。

宗輔の本をめくる仕草は、他のモノたちとは一線を画して

丁寧かつスピーディー。

めくっては投げ捨て、めくっては投げ捨てを繰り返す。

宗輔「(一冊の本をめくり続けてる浮浪者Cに) いつまでめくってんだよ。次いけ次！」

宗輔「(インチキ講師のように) はい、自分の事だけじゃ無い。みんなの事思ってー。みんなの為のこの一冊。この一ページ。そう願いなからー？」

宗輔「(本を逆さで持ったままの浮浪者Dに) なにしてんだ、字い読めないくせに」

宗輔「丁寧。こう。見つかると思っていれば、必ず見つかるからね。気持ちを込めて。ちゃんと逆さにして振る。無い！」

宗輔、本をぶん投げる。と、

宗輔「あ！ 金だ！」

宗輔、ゴミの山に飛びかかって必死に掘り返す。
浮浪者たちもたかってくるが、宗輔跳ねのける。

宗輔「クソ！ 邪魔だ！ どけって！ 俺が見つけたんだよ！」

宗輔、見つけたのは硬貨のようなもの。
一瞬息をのむが、

宗輔「なんだ。平たい石か」

宗輔、石をぼいっと投げ捨てる。
浮浪者たち、なんだよ〜と言う風情でまた作業に戻る。

宗輔「……(急に怒りがわいて) なんだよ平たい石って！」

宗輔も再び作業に戻ろうとするが、ふいに立ち止まって、石を拾い直しポケットに入れる。

宗輔「(浮浪者たちに) ……どうよ」

浮浪者たち「(やれやれと言った風情)」

宗輔「このへんはもー一通り見たか……」

マル「(二通りどころか、十通りは見た)」

宗輔「(オウム返しで)一通りどころか十通りは見た」

浮浪者C「いや、二十通りは見た」

浮浪者D「五十は見たね」

浮浪者C「じゃあ一億六百六千兆万回見たー」

宗輔「いいよ。なんで張り合うんだよ。そうだよ。もうどれだけページをめくっても、虫一匹出てこない」

宗輔、本の山に座り込む。

浮浪者たちも、ぐったりと座り込む。

宗輔「あー……腹減った……。せめてなあ、ここにある本が売れりゃあいいんだけど」

マル「(売れないの?)」

宗輔「売れねえよ。さいきんはだってもーなんか、アレだろ? デジタルのなんかこう……本をこう……ギョツてこう……してる奴があるんだから。わざわざ紙の本を買う奴なんていないの」

宗輔の腹が鳴る。

宗輔「マル。なんか無い? このゴミの山を金に変える方法」
マル「……」

宗輔、おもむろに立ち上がると実演販売を始める。

宗輔「さあ、ここにございます本。ただの本だと思ってもらっちゃ困りますよ。立ち仕事で疲れたなあと思つた時に、ちよいと地面に置いてもらやあイスに、頭の下に敷けば枕、鍋を置いたら鍋敷きに。読みかけの本に挟んでいただければ葉に。お子様の歯固めにもご利用いただけます。さらに」

宗輔、実演販売しながら浮浪者Dに、立って襲いかかるように促す。

宗輔「暴漢に襲われた時には防具に」

宗輔、浮浪者Dのパンチを本で受け、

宗輔「また時には武器にもなります。ここをこう交わして、角で人中をこう。後ろに回って背表紙で後頭部をこう。鈍器にもなります」

宗輔、大振りで浮浪者Dの頭上に本を振り下ろそうとした所、マルに止められる。

浮浪者D、慌てて逃げる。

宗輔「こーんなに便利なのに、通勤カバンにスツとしのばせられるコンパクトさ！ こんな魅力的なアイテムが、今なら特別！ 税込み特価！ 990円！ 990円でお求めいただけます！ さあどう！ どうですどうですどうです！・・・なんてな」

浮浪者たち、ふらふらと宗輔の方へよっていき、次第に本の奪い合いになる。

宗輔「わ、ちょ、やめろやめろやめろ！（浮浪者たちを払いのけ）バカ共！ 周りを見ろ！ こんなもの掃いて捨てる程ある！ ていうか捨てられてる！ ……やっぱダメだ。こんなものに金払うようなバカが、いるとは思えねえ。…いたとして、金持ってるわけがねえ」

みんなして途方に暮れる。

浮浪者たちの腹が鳴る。

浮浪者C「ぐう」

浮浪者D「ぐう」

浮浪者C「ぐう」

浮浪者D「ぐう」

宗輔「うるせえな」

浮浪者D「ぐう？」

浮浪者C「ぐうー！」

浮浪者D「ぐーう？」

浮浪者C「ぐーう」

宗輔「やめろ。腹の虫で会話すんな。わかり合うな」

マル「くしゃみ」

宗輔「……燃やすか。こんなゴミでも、燃やせば暖ぐらいとれるだろ。な。いつそ清々するよな。その方が、金目のものも見つけやすくなるかもしれないし……」

宗輔ポケットからライターを取り出して本の山に火をつ

けようとするが、マルと浮浪者たちに止められる。

と、そこへ閣下がやってくる。

宗輔「はなせよく！全部燃やしてやる」

閣下「やめとけ。紙はバツと燃えて、すぐに燃え尽きる。暖をとるつたつて一晩も持たねえよ」

宗輔「閣下」

閣下「お前ら、腹減ってるんなら東宝ビルいけよ。もう炊き出し始まつてるぞ。お前らの分残しておくようにちゃんと行ってあるから」

浮浪者たち、閣下にペコペコしながら足早に去って行く。

宗輔も続こうとするが、

閣下「ん（菓子パンを二つ差し出す）」

宗輔「ああ……。俺らの分まで。わるいね」

閣下「ついでだから」

宗輔「いつもお世話になっております」

閣下「なにいつて。こっちこそ世話になってるよ。連中の面倒よく見てくれる」

宗輔「面倒見てもらってるのは俺らだから」

閣下「ま、助け合いか。自助共助ってね」

遠くで、新聞小僧の音がする。

新聞小僧「ごうがーいごうがーい」

宗輔「号外配ってる」

閣下「金持ちが死んだか」

宗輔「わかるの？」

閣下「そりやお前、今時号外なんてのはみんな、美談のオプシオンだよ」

宗輔「オプシオン？」

閣下 「金持ちが、金に物言わせて書かせた美談で死んで、それを言いふらしてる。俺の死に様はこんなビックニュースになるんだぞ、すごいだろって。広告だよ。いくらかかってるんだか」

宗輔 「へえ……」

閣下 「金払ってあんなゴミばらまく余裕があるんなら、俺たちに金配れっつての……」

宗輔 「そっちはどう。いいもの見つかった？」

閣下 「いや。……最近ますます酷くなるなあ。東京のゴミ溜め、歌舞伎町の名が廃るよ。俺の若い頃はこんなじゃなかった。ゴミ箱は残飯でパンパンだったし、馬鹿な酔っ払いからはスリ放題、仕事帰りの風俗嬢が機嫌よけりやお駄賃恵んでくれてさ。それが今やどうだ。女を買えるだけの金を持った男がいなくなって、女がいなくなつて、その辺一带の風俗ビルが全部俺たちの寢床になつてる。おまけにまともなゴミを捨てに来る奴もいなくなつた。全く。日本人つてのはいつのまに、ゴミを捨てる余裕もないくらい貧しくなつたんだか……。くそ、酒が飲みてえ……」

宗輔 「いいな……」

閣下 「ん？」

宗輔 「その頃の歌舞伎町なら、マル一人喰わせるぐらいどうつて事無かつたんだろうな」

閣下 「そうかもな」

マル 「……」

宗輔 「心配すんなつて。妹一人面倒見れなくてどうするよ。ほら」

宗輔、ポケットからボロい巾着袋を取り出す。

振るとチャリチャリ音がする。

宗輔 「少しずつだけど金も貯まつてる。そのうちお前の喉も、きつと治してやるからな」

マル、にっこり。宗輔もにっこり。

閣下 「あー……宗輔、ちよつと相談があつてなあ」

宗輔 「……なに」

閣下 「お前ちよつと……いくらか用立ててくれねえあ？」

宗輔 「は？ なに、金？」

閣下 「また、赤ん坊が捨てられてたんだよ」

宗輔 「またあ?!」

閣下 「それがまあほんとに赤ん坊でな。ミルクが無いとどうにも……。

でもほらないだろ、ミルクなんて……だから……その……、ミルク代をさ……」

宗輔 「ダメだ」

閣下 「少しでいいんだ」

宗輔 「金なんて持ってねえって!」

閣下 「持つてるだろ? そのゝマルの」

宗輔 「だめだ。これだけはダメ!」

閣下 「ちゃんと返すよ」

宗輔 「いやだ! 返す当てなんてねえだろうが!」

閣下 「そこはほら、なんとかするから」

宗輔 「なんとかってなんだよ!」

閣下 「明日の炊き出し、お前にパン一個余分に渡すよう口きいとくから」

宗輔 「パン一個とかふざけてんのか?!」

閣下 「赤ん坊がどうなってもいいのか!」

宗輔 「知るかそんなもん!」

閣下 「やい宗輔! てめえどうやってそこまでデカくなったと思ってるだ! 歌舞伎町のみんなが無いものをギリギリ絞って絞り出して、その寄せ集めでそこまでデカくなったんだろ?! 今度はお前がギリギリ絞る番だろうが!」

宗輔 「なんだよマルまで……。ダメなもんはダメなんだよ!」

閣下 「よこせ!」

閣下、宗輔に飛びかかるが交わされて尻餅ついてしまう。

宗輔、慌てて駆け寄り、

宗輔 「ごめん! 閣下、ケガしてないか? 腰大丈夫か? 立てる?」

閣下 「(宗輔の手をふりほどき)……」

宗輔、自分の分の菓子パンを閣下に渡す。

宗輔 「悪いけど……これで勘弁してよ……ほんと悪いけど……」

閣下、パンを乱暴に自分のポケットに押し込む。

宗輔 「くそ。なんで俺らがこんなこと……」

マル 「(金さえあればな……)」

宗輔 「ん？」

マル 「(金さえあれば)」

宗輔 「ああ……金さえあればな」

マル、自分の菓子パンを宗輔に渡そうとするが、宗輔はそっぽを向いてしまう。

マル、ポケットに菓子パンを押し込む。

新聞小僧が号外を持って現れる。

新聞小僧 「ごうがーいごうがーい。松岡外相ジュネーブで死亡！ 号

外だよー！」

閣下 「なんだよ！ あっち行け！ シツシツ！」

宗輔 「おい(閣下をたしなめる意)」

閣下 「(小僧に) 見ろこのゴミの山！ ええ？！ お前はまだゴミを増やす気か？ こっちは金持ちの道楽につきあう余裕はねえんだよ！」

宗輔 「当たるなつて。コイツだって、仕事してんだろ。一つもらうよ」

新聞小僧 「ありがとうございます！」

閣下 「おい」

宗輔 「いいだろ？ タダだし」

新聞小僧 「ありがとうございます！」

新聞小僧。逃げるように去る。

閣下 「二度とくんなよバカ！ 新聞配るなら金配れ！」

宗輔 「外務大臣死んだつて」

閣下 「そんなもん読むなよ」

宗輔 「国連総会出席のためスイスのジュネーブに滞在していた松岡外務大臣、現地の銃撃戦に巻きこまれ死亡。外相自ら現地住民の避難誘導に当たっていたところ被弾。松岡外相の勇氣ある行動に世界各国から賞賛の声……。ヘーテロリストから子供を守ったつて」

閣下 「(くさして) さすが。立派な美談だ」

宗輔 「これが？」

閣下 「相当金掛けてるよ」

宗輔「どのくらい」

閣下「この規模だとなく。億はくだらねえだろうな」

宗輔「億?!」

閣下「ほらこの、三好瞳子って作家。ユイツの原稿料だけでも相当なものだ。400字詰め原稿用紙一枚で100万取って言うんだから」

宗輔「400字で100万?! 一文字書いたら……(計算するが)わからない!」

閣下「ああ、わからない!」

宗輔「すごい高いのはわかる!」

閣下「そもそも、この三好ってのは当代きっての売れっ子だもの。ここ何年かの間に死んだ政治家の美談は全部三好瞳子が書いてるって言うんだから」

宗輔「こんなのが?」

閣下「あ?」

三好、号外を読みながら現れる。

宗輔「だってなんか……ベタじゃねえ? どっかで見た事ある感じって

言うかさ。その辺の雑誌記事の寄せ集めって感じじゃん」

閣下「そ、そうか?」

宗輔「誰にでもかけるだろこんなもん」

閣下「そうか?!」

宗輔「俺でも出来る」

宗輔、そこらへんの古本、古新聞、古雑誌のページを適当に破って組み合わせながら、即興で美談を作っていく。

宗輔「難病により余命一ヶ月と宣告された貴方は、恋人の負担になってはいけないと自ら別れを告げる。最後は自然の中で迎えようと屋久島に身を寄せる貴方だったが……」

閣下「ちよちよちよ、宗輔!」

宗輔「あ?」

閣下「お前、ここにある本の中身、全部頭に入ってるのか?」

宗輔「ここって言うか、歌舞伎町中」

閣下「歌舞伎町中?!」

宗輔「そりや毎日これだけ本のページをめくってればな」

閣下 「そういうもんか?!」

宗輔 「生半可な気持ちでゴミ漁ってねえから。最後は自然の中で迎えようと屋久島に身を寄せる貴方だったが……そこに貴方を探して恋人がやってくる。「君の一生を僕に下さい」貴方は葛藤しながらも恋人のプロポーズを受け入れ、そして一ヶ月後……。貴方は純白のドレスに身を包み、恋人の胸に抱かれながら、屋久杉の根元で静かに生涯を閉じるのだった」

閣下 「へえ! 宗輔! お前にこんな特技があったとはな」

宗輔 「特技? そんなたいしたもんじゃねえよ。閣下だって出来る。マルにだって」

閣下 「そうか?」

宗輔 「でも、美談作家ってのは阿漕な商売だな。こんなもんが金になるなら、俺ならすぐに億万長者だよ」

三好、ずいと近づいてきて。

三好 「その美談、私に売ってくださいらない?」

宗輔 「わ!」

三好 「おいくら?」

宗輔 「……は?」

三好 「驚いた。こんなところにあなたみたいな浮浪者……(と言いかけたが、言い直して) フリーランスの美談作家がいるなんて」

宗輔 「フリーランス?」

三好 「……生活スタイルが? フリーって事」

宗輔 「俺が美談作家?」

三好 「そうなんですよ? ね、おいくら? その美談」

宗輔 「その美談って……屋久杉の?」

三好 「そう、屋久杉の。余命一ヶ月の花嫁。おいくら?」

宗輔 「(状況の飲み込めず) は?」

閣下 「なんだあんた。ここはあんたみたいな上品なご婦人がうろついている場所じゃ無い」

三好 「この世界に私がうろついたりいけな場所なんてない」

閣下 「はあ?!」

三好 「いくら払えばいい?(いそいそと財布を取り出しながら) ごめんなさい、今手持ちの現金が少なくて。最近すっかりキャッシュレスですよ?」

閣下「(宗輔を引き寄せて)おい宗輔。このご婦人、お前の体がめあてだ」
宗輔「え！」

閣下「ほらいくぞ。こーゆータイプは性欲が強くて割に合わねえ」

三好「まんざらでなく)やめてよ。三万? 五万円ってトコかしら?」

宗輔、閣下、財布から覗く札束に釘付けになる。

宗輔「俺、あんまり慣れてないけど、それでよければ……」

閣下「……(ハツとして)だめだめだめだめ」

宗輔「だけど、閣下、五万円！」

閣下「マルが見てる！」

宗輔「マル! 兄ちゃんの事、恥ずかしい人間だって思わないでくれよ！」

三好「違う違う。貴方の体には興味ないから。本当に、あなたの美談を売って欲しいって言ってるの」

宗輔「……あんた本当に俺の美談を買って言ってるのか」

閣下「なああんた、貧乏人をからかって楽しいか?」

三好「私は本気」

三好、宗輔のポケットに金を忍び込ませると、宗輔の手元から切り抜き記事の束を抜き取る。

宗輔「……閣下、ゴミが、金になった……」

三好「お金、もっと欲しい?」

宗輔「ほしい!!」

閣下「宗輔！」

三好「もっと大きな仕事があるの。大きくて、やりがいのある仕事」

宗輔「どんな仕事つか!」

三好「私の為に、この世で一番くだらない美談を書いて下さらない?」

宗輔「この世で一番くだらない美談?」

三好「もしあなたが、私の望むとおりに、くだらない美談を書き上げたら、私の人生あなたにあげる」

宗輔「は?」

三好「私がこれまでの人生で築き上げた人脈、抱えている顧客、書いてきた美談の著作権、印税、全部あなたに譲ってあげる。あなたは、

私の後継者になるの」

宗輔「ちよっとまって、え? ……あんた誰」

三好、名刺を差し出す。

三好「三好瞳子。このくだらない美談で、外務大臣から大金を巻き上げた阿漕な美談作家」

宗輔「(名刺受け取り)……閣下、あつたよ、このゴミの山を金に換える方法！」

閣下「(宗輔から名刺を奪い)やめとけ。こういう連中とつきあうと碌なことが無い。俺の経験上」

宗輔「さらにその名刺を奪い)見ただろ?! ゴミを拾い集めて作った美談が五万だ! コイツの跡を継げば、きつともつと……。マルの治療費だつてすぐに稼げる!」

閣下「三好瞳子がお前に跡を継がせるなんて本気で思ってるのか?」

宗輔「ウソでも何でも! 断る余裕なんか無いだろ今の俺たちには。この話が本当なら、粉ミルクだつて山程買える! 粉ミルクどころか、この街にいるみんなを喰わせてやる事だつて出来る。こんなもん(号外)に金を使う金持ちから、金を巻き上げてやれるんだよ!」

閣下「それは、そうだが……」

三好「あなたが彼のマネージャー?」

閣下「マネージャー?」

三好「仲介料はこれくらいでいいかしら?」

閣下、しれっと金を受け取る。

三好「話、まとまったかしら。どう、やる?」

三好、ポケットから万年筆を差し出す。

宗輔、その万年筆をひったくるようにとる。

三好「大丈夫。あなたがちゃんとくだらない美談を書き上げるまで、しっかりと面倒見てあげるから。手取り足取り」

宗輔「はい!」

三好「よろしくね、新人美談作家さん。言っとくけど、私、後輩には敵しいから」

宗輔「はい!」

三好「じゃあ早速。さっきの美談、ちゃんと清書して。これじゃ売り物

にならないから」

三好、切り抜きをを投げ捨てる。
宗輔、それを犬のようにひろう。

宗輔「はい！」

三好「あなた名前は？」

宗輔「小泉宗輔」

〇2、三好のおフィス

宗輔、閣下、三好はハケ、舞台上にはマル一人。
手話ニュースが始まる。

手話ニュース

「こんにちは。お昼のニュースです。テロリストから一般人を守った松岡外相の勇気ある行動を受け、各国首脳から哀悼と勝算の声が届いております。また、低迷していた内閣支持率が21%まで回復。日経平均株価も、3年半ぶりに3万467円75銭の高値を更新しました。東京外国為替市場では円相場は小幅に上昇。週明けにはさらなる上昇が見込まれます。松岡外相の地元山口県では、松岡外相の顔を象ったまっちゃんまんじゅうを買い求めようと、菓子店に県民が押し寄せています。山口県知事は松岡洋右記念館の建設を発表。来年3月のオープンを目指すことです」

ニュースの間に、竹田と岡本が現れる。

そこは三好瞳子のオフィス。

岡本はうなだれている。

竹田「どうすんの」

岡本「いやー……」

竹田「どうすんの」

岡本「多分、もうすぐ連絡来ると思うんで」

竹田「そう言ってもう3時間待ってるんだけど」

岡本「いやほんとに、ほんとにもうそろそろかなって」

竹田「なんでわかるの」

岡本「先生の……：雰囲気？」

竹田「雰囲気って」

岡本「ほんとにほんとに。先生って筆が乗ってる時、顔がこーー」

竹田「顔？」

岡本「膨張するんですよ。横に！」

竹田「はあ……」

岡本「本当なんです！ 先生って原稿書く時、歯を食いしばる癖があるんですよ！ それでこう、執筆が佳境に迫ってくるとこの辺（エラあたり）が。ムキムキキッって。昨日お会いした時は、このくらいになってました」

竹田「ほんとにいい？」

岡本「本当です！ 1. 3倍にはなっていました！ これが1. 5倍までいったら脱稿です！」

竹田「はいはいもしいいよ。時間稼ぎの戯れ言はさ」

岡本「本当なんです！ 本当にあと少しなんです！！」

竹田「うるさい！」

岡本「……すみません」

竹田「……君も大変だね。ルーズな上司を持つとき。私も秘書の仕事が長いから、君の気持ちはわかるけど」

岡本「私は書生です」

竹田「同じようなもんだろ」

岡本「……でも本当に、いま先生頑張ってるんじゃないかと思うので」

竹田「売れっ子だなんだ言ってたってね、締め切り守れなきゃプロとは言えないんじゃないですかねえ？」

岡本「すみません……」

竹田「こっちは人の命がかかっているんだから」

岡本「……犬養総理、お加減悪いですか？」

竹田「良くないね……。最近は何会答弁もまともに出来なくて。医者の話じゃあともう一年も持たないんじゃないかって話だよ」

岡本「一年……」

竹田「どおとおすんだ！ 一般人でさえ美談の準備に最低1年はかけるっていうのに、一国の総理の美談が、まだ影も形もないなんて！」

岡本「すみません！」

竹田「日本国内閣総理大臣の美談だぞ?! どんな状況であれ、立派に送り出す準備をしなきゃならない。誰が？ 総理主席秘書官の私
がだ！」

岡本「はい……」

竹田「準備が間に合えばまだいい。美談が完成する前に犬養総理が死んだらどうする？！ 犬死にじゃないか！ 前代未聞だぞ！」

岡本「あの、もう少し伸ばせませんか……？」

竹田「何を」

岡本「死期を」

竹田「……君たち作家は人の時間をなんだと思ってる？ え？ 死を目前にした人間に対してよくそんなことが言えたな？」

岡本「政界を引退なさって、すこし療養期間を取るとか」

竹田「なにもわかってない。いつ、誰が、どのタイミングで権力を握るか、非常に繊細なバランスで動いてるんだよ政治って言うのは！」

岡本「申し訳ありません！」

竹田「今我が内閣は空前の支持率低迷にあえいでいる。犬養首相には立派な美談の花道でこの世からご退場頂かなければ、首相交代後の選挙で野党に政権を奪われかねない！ そうなればアメリカ、フランス、イギリスが何をしてくるか。ええ？！ 膨張し続ける中国に押されて、今アジアは非常に緊迫した状態にあるんだ。この美談に日本の将来がかかっているんだぞ！」

岡本「すみません！」

竹田「なんで作家はこう常識がないんだ。今日中についていって、本当に今日中に原稿が来た事なんてありやしない。今日中といえば、だいたい次の日の昼まで待たされる。あと2、3日お時間下さ〜いとかいって、ほっときや一週間も二週間も連絡よこさない。作家はなんだ？ 時間という概念すら自在に書き換えられるとでも思ってるのか?!」

岡本「全ての作家がそういうわけでは！」

竹田「おたくはそうだろ。おたくの三好瞳子は！」

岡本「先生はお忙しすぎるんです」

竹田「じゃあ君の責任なんだな？」

岡本「えっ」

竹田「スケジュール管理も書生の仕事だろ。このまま総理が犬死にしたら、君が腹を切って詫びるんだな？！ 私が君の立場ならそうするけどねえ?!」

岡本「やめましようよそんな、戦国時代じゃないんだから」

竹田「そのくらいの話だよ」

岡本「でもあのこれは……言い訳ではないのですが、先生がこんなに筆が進まないことは初めてで。いままで仕事で締め切りを破った事

なんてないんです。それがどうも最近様子がおかしくて。仕事場に
来ても落ちつかず、すぐに気晴らしだなんだとゲームをしたり
散歩に出かけたり……」

竹田「具合が悪いのか？」

岡本「そういう感じには見えないですけど」

竹田「余命診断の結果は。まさか死期が迫ってるなんて言わないよな？」

岡本「この間受けたばかりでまだ結果は」

竹田「あそう」

岡本「やっぱり、総理の美談執筆という仕事に重圧を感じてらっしゃる
のではないかと……」

竹田「そんなもの言い訳になるか」

岡本「はい。だから、さきほど言い訳ではないですと」

竹田「じゃあなんだ今の話は！」

岡本「わかって戴きたくて」

竹田「なにを」

岡本「私のせいではありません」

竹田「……そういうのを言い訳と言うんだよ」

岡本「……」

竹田「……連絡は」

岡本「まだです。あの」

竹田「なんだ」

岡本「他の作家に書かせるという選択肢はないんですか？」

竹田「総理の美談を？ 三好瞳子以外に？ 誰がそんなもん書けるって
言うんだ」

岡本「……私が」

竹田「うん？」

岡本「私が」

竹田「バカを言うな。たかが書生が」

岡本「たかが書生ではありません！ 私はもう10年も三好先生の傍で
勉強してきました！ 三好先生のアイデア出しに付き合ったり、
プロットや原稿の下書きも任されています！ 今、新作を三好先
生に読んでもらっているんです。それで、三好先生に納得してい
ただければ、先生の後継者としてデビューを認めてくれるって！」

竹田「三好瞳子の後継者として？」

岡本「はい。ですから、三好先生の出来ないお仕事は私が」

竹田「いやいやいやいや」

岡本「実績がないのはわかってます！ でも、私は三好瞳子が唯一傍に置き続けた弟子です！ 先生のことは誰よりもわかっているし、先生の作風も受け継いでいます。お仕事を任せて戴ければ、先生と遜色ない美談を書き上げられます。実績はありませんが、その辺の美談作家よりも、良い物を書く自信があるんです。ですから……」

竹田「じゃあ君、三好瞳子に切腹させなさいよ」

岡本「は？」

竹田「いくら君が三好瞳子の一番弟子だと言ったってねえ、当の本人がぴんぴんしてたら、そりゃ依頼人は納得しないよ。三好に書かせろってなるでしょ」

岡本「いや」

竹田「でも、三好瞳子が死んだら？ そうなったら、その辺のポツとで作家より、後継者の君に書いて欲しいって話になる。な？ 書きたきゃそのくらいのことしなきゃ」

岡本「ちょっと、趣味の悪い冗談はやめて下さいよ」

竹田「10年かあ」

岡本「はい？」

竹田「同世代の作家達はみんな独り立ちしてそれなりの生活をしてるだろう。それなのに君は10年。三好瞳子の下働きで、実績という実績もない」

岡本「……」

竹田「君の10年は三好瞳子に喰われちゃったんだよ？ どうだ。憎いだろあの女が。」

岡本「そんなことは！」

竹田「自分の創作のために君の青春を搾取したあの女が」

岡本「搾取だなんて」

竹田「大丈夫。私も力を貸そう。こういう仕事をやっているとね、何でもやってくれる人間というのを何人が抱えられるようになるんだ」

岡本「何言ってるんですか」

竹田「安心しなさい。誰だって君に同情する。君があの子の命と引き換えに青春を取り戻そうとしたって誰も責めない」

岡本「やめてください！ 私は先生を尊敬しています！ 先生の書く文字、先生の話す言葉、先生の一举手一投足から、得がたいものを得ています！ 私は生まれ変わるなら先生の文字になりたいですらおもってるんです！ それを！」

竹田「わかったわかった。悪かったよ」

岡本「悪い冗談ですよ……」

竹田「冗談で済むかどうかは、彼女次第だよ」

岡本「え？」

竹田「いい加減私も腹に据えかねてるんでね。さっさと首相の美談を完成させるか。それが出来なきゃ腹を切るか、誰かに腹を切らせるか」

岡本「そんな……」

竹田「政治家を舐めちゃいけないよ」

岡本「竹田さん、今日のお話は全て先生にお伝えしますから」

竹田「構いませんよ？ 少しは本気になるだろう」

竹田、出て行きかけて、

竹田「あと三日だけ、待ちましょう」

岡本「え」

竹田「それまでに、箱書きでもプロットでもなんでも良い。今三好瞳子に出来る誠意を見せろと言っておけ」

岡本「……はい」

竹田「ほんとの三日だよ？ 土日挟んで五日とかじゃないからね？！」

岡本「わ、わかってます！」

竹田「先生によろしく」

竹田出ていく。

岡本、携帯をとりだして電話をかける。

岡本「先生……」

○3、宗輔の住処

宗輔と三好がやってくる。

三好の手には、宗輔のノート。

宗輔はいそいそと部屋を整え、三好を迎え入れる準備をしている。

三好の携帯が鳴っている。

三好、それを取り出すと、すぐに切ってしまう。

と、岡本舞台上から去る。

宗輔「先生！こちらです！」

三好「（一転笑顔になって）ああ」

宗輔「そこ足元気をつけて」

三好「おっとっと」

宗輔「ほんとにうちでいいんすか？ 喫茶店とか行かなくても」

三好「だって、あなたそのカッコで喫茶店とか入れないじゃない」

宗輔「あー……すいません」

三好「いいのよおもしろいから！ こんな場所、滅多にこれないし」

宗輔「おもしろい？」

三好「さつき通った道、すごかった。地べたに人がごろごろ転がってて！ 冬なのに！ 寒くないの？」

宗輔「寒いですよ」

三好「え、じゃあ、ただ耐えてるんだ！ 特殊能力ねもはや」

宗輔「（へらへらと話を合わせて）そんなもんっすかね」。

三好「おもしろいわ〜」

宗輔「おもしろいっすよね〜！」

三好「それにさ、あの段ボールハウス？ この世にさ、あんなにぴったりに、人が横になったサイズの段ボールって存在する訳？」

宗輔「ぴったりサイズに作るんですよ」

三好「職人技。あなたにはちゃんとうちがあるんだ」

宗輔「風俗ビルの廃墟に勝手に住み着いてるだけですけど」

三好、窓から身を乗り出して、

三好「あそこの行列は？」

宗輔「炊き出しに並んでるんすよ」

三好「バーベキューみたい。たのしそー。あそこで場所取りしてる人たち
ちは？」

宗輔「現金仕事してる連中が手配師来るのを待ってるんすよ」

三好「現金仕事？ 手配師？」

宗輔「説明したってわからないでしょ」

三好「え？」

宗輔「そろそろ打ち合わせ始めませんか？ くだらない美談っていうの？ こないだからいくつかアイデア書きためたんで……」

三好「わ、すごい！ あそこ喧嘩喧嘩！」

宗輔「娛樂みたいなもんですよ。他にやる事が無いもんで」

三好「子どもも結構いるんだー」

宗輔「捨ててく連中がいるんで」

三好「アレ?!」

宗輔「どうしました?!」

三好「財布盗まれた!」

宗輔「ええ?! すいませんやっぱ場所変えましょう!」

三好「おおしろーい! 私スリって初めて! すごい歌舞伎町! 期

待以上のワンダーランドって感じ」

宗輔「……。そっからゴジラ見えますよ」

三好「え、うそどこ?」

宗輔「そこ」

三好「え?」

宗輔「もうちよつと奥。右足一步まえ。左足半歩下がって。いやいやもうちよつと右……そこ!」

三好「あほんとだー。なぜ歌舞伎町の真ん中にゴジラが」

宗輔「昔の人の考える事はわかんないっすよね」

三好「おもしろ(と言いかけて) つめた!」

宗輔「あ、すいません、そこ、雨漏りするんですよ」

三好「……気分害した?」

宗輔「(笑顔で) べつに。なんでですか」

三好、帰ろうとする。

宗輔「えっちよつと待ってどこ行くんすか!」

三好「日、改めよ?」

宗輔「いや待って待って待って」

三好「嫌々仕事されても」

宗輔「嫌々とかないでず全然大歓迎」

三好「……じゃ、始めるよっか」

宗輔「はい! こちらに座っていただいて!」

宗輔の拭いたイスの上に、ハンカチを引いて座る三好。

三好、持っていたノートをパラパラめくる。

ノートには様々な記事・書籍の切れ端がスクラップされている。

宗輔 「あ、ちょっと暗いっすかね」
三好 「ちよっとね。ああでもないよ別に」

と三好が言ってる間に、宗輔、ケーブルを引き出して繋げると、とんちんかんな場所に明かりが灯る。
その明かりを消すと、三好の近くの居酒屋看板にライトが灯る。

三好 「どゆこと?!」

宗輔 「はあ」

三好 「やっぱりおもしろいわ」

宗輔 「で、どうすか? あれからいくつか書きためてみたんすけど」

三好 「んー……」

閣下、千鳥足でやってくる。

閣下 「宗輔、どうだ。金もらえたかあ」

宗輔 「閣下?」

閣下 「あくこれは、先生、先生、三好大先生。どうすかー? うちの宗輔」

宗輔 「飲んでんの? え? 金どうした?」

閣下 「それはもうそこにいらっしやる三好大先生から祝い酒を賜りましてナンマイダくナンマイダく」

宗輔 「ダメですよ、閣下に酒なんて!」

三好 「いいわよべつに。たいした金額じゃないし」

宗輔 「金額の問題じゃなくて」

閣下 「先生♪」

と、閣下、歌謡曲「せんせい」のサビを歌いながら機嫌良くふるつく。

宗輔 「こうなっちゃうから」

三好 「ああ」

宗輔、閣下を甲斐甲斐しく世話している。

宗輔 「ふらふらすんなってケガするから」

閣下 「あくなんか冷たいのが来る〜」

宗輔 「ほらそこ雨漏り雨漏り」

三好 「この人君のお父さん？」

宗輔 「いや、世話人って言うか。この辺一带の浮浪者の」

三好 「ああ、だから閣下」

宗輔 「いやそれはちがくて」

閣下 「私は第40代内閣総理大臣であるぞ！」

三好 「わあなんだびっくりした〜！」

宗輔 「酔っ払うと自分のこと総理大臣だって言うんですよ」

閣下 「私の葬式には、臣民臣下がこぞって弔問に訪れ、ぼうだの涙に靖

国の姿もかすむであろう！」

宗輔 「わかったからもう、ねろって」

閣下 「違うんだよ宗輔〜そうじゃないんだって〜」

宗輔 「はいはい」

宗輔、閣下を引きずっていかうとするが全然思い通りに行かない。

三好 「おもしろい……。人間って生涯一度として経験した事のない、経験するはずの無い事でも夢に見るの」

宗輔 「タダの酔っ払いの戯れ言ですよ」

閣下 「違うんだって〜宗輔〜こんなはずじゃ無かったんだよ俺の人生〜。俺は日本国の総理大臣として〜お前たちを幸せにしたかっただけなの」

宗輔 「はいはい、ありがとありがと。俺、今先生と打ち合わせ中だから」

閣下 「なあ宗輔〜。金持ちから金を巻き上げてさ……」

宗輔 「おう」

閣下 「雨漏り直そうな〜」

宗輔 「雨漏りかよ」

閣下 「こここの、こここの雨漏り。こことこことこことここと〜」

宗輔 「分かった分かった。多いな雨漏りが！」

閣下 「歌舞伎町中の雨漏り直さなきゃ。いっぱい直さなきゃいけないんだよ？ 俺はさ、総理大臣だから」

宗輔 「はいよ。おやすみね。はい」

閣下、部屋の片隅で横になる。

三好「大変ね。あなたがいつも面倒みてるの？」

宗輔「まあ、恩があるんで。閣下についていうか、歌舞伎町の連中全員にですけど」

三好「ずっと歌舞伎町？」

宗輔「まあ、物心ついた頃から？ 妹と」

三好「妹さん？」

宗輔「ああ、口聞けないんで。いっすよかまわなくて」

三好「あそう。妹さんどうしたの。病気かなにか？」

宗輔「喉焼かれました。赤ん坊の頃。泣き声がうるさいからって、ヤカンで熱湯を喉に流し込まれて」

三好「うわ、何それ。親にやられたの？」

宗輔「さあ。あれは誰だったんだろうな……。もう覚えてないっすね」

三好「そう」

宗輔「それで俺はマルを連れて逃げて」

三好「マルちゃん」

宗輔「俺がつけた名前なんすけどね。丸かったから。赤ん坊の時。まあ今も丸いっすけど」

マル【宗輔を小突く】

三好「可愛いじゃない」

宗輔「それで歌舞伎町に来て、閣下に拾われて。まあそんな感じっす」

三好「へー」

宗輔「……喉の手術ってどのくらいかかるんすかね」

三好「知らないけど。私の跡を継げば、いくらでもできるわよそんなの」

宗輔「そっすか」

三好「あなたにもあるんだ。美談が」

宗輔「は？」

三好「貧しいながらも妹や仲間の為に、必死で頑張るよき兄？」

宗輔「作り話と一緒にするな」

三好「……」

宗輔「いや、そういうじゃないんで。そんな、先生が書く美談みたいな立派なものじゃ無いって話ですよ」

三好「ああ、これ（宗輔のノート）なんだけど」

宗輔「はい！」

三好「全然ダメ」

宗輔「……え？（ものすごく意外で）」

三好「『……えっ』じゃないわ。なにこれ。なんだこれ」

宗輔「え、でもこれよくないスか？ 狼に育てられた少女が」

三好「ちがうちがうちがうちがう」

宗輔「富士山に眠る伝説の白い大蛇を倒して、富士山大噴火を食い止めたあと、火口に落ちて死ぬ」

三好「出だしからダメだし、そのあともダメ。何、狼に育てられた少女って。誰それ、どこにいんのそんなもん」

宗輔「じゃあこの朝、起きたら他人の体と入れ替わるやつは？」

三好「入れ替わらないじゃない、他人と。体は」

宗輔「だけどこれすごい人気のやつらしいですよ」

三好「大体入れ替わったまま死んだら、これ誰の美談になるわけ？ 体？

中身？ 君、リアリティーって言葉知ってる？」

宗輔「だけど！ 美談なんか全部作り話じゃないっすか！」

三好「あのね、美談って言うのは実在する人間の生涯の最期を飾るストーリーなの。ウソつくにしたって、その枠の中でつかなきや」

宗輔「えー」

三好「あと難病ものと記憶喪失もの多すぎ」

宗輔「サンプルが多いんで」

三好「それにね、もっとくだらなくして」

宗輔「……いや現時点で相当」

三好「くだらないよ。ものすごくくだらないけど。そのくだらなさの中にさ、こう、ドラマチックにしてやろうって魂胆が見えちゃってるじゃない」

宗輔「まあそりゃ、だって美談だし」

三好「いらなの、やめて。そういうの。ドラマチックいらなの。なんて言ったらいいかなー。くだらないっていうかさ、もっと、実にならない感じ？ なんにもならないっていうかさー」

宗輔「わっかんないっすね」

三好「もっとくだらなさにストイックであってほしいの」

宗輔「じゃあ、あの、先生が望む美談て……どんななんですか」

三好「……『無意味な死』」

宗輔「……はあ」

三好「なんていうかさ、その死によって、人生の価値が左右されない死？ 良くあるじゃん。ろくでもない人間が、死んだ途端にいい人扱いさ

れる奴？　なんだかんだいい奴だったよ、みたいな。家族に見送られて、安らかな最後だったよ。立派な人だったよ、みたいなさ」

宗輔「ああ」

三好「そういう要素の一切無い死。ただ死ぬ。可も無く不可も無く。そういう美談をお願いします」

宗輔「それ、美談って言うんですかね」

三好「ああ、たしかに。美しくある必要は無いね。ただまあ、形式的に？

美談と呼びましょう」

閣下「人間って、金持つと馬鹿になるのかー？」

閣下目を覚ます。

先ほどよりも酒が抜けて、いつもの閣下と酔っ払いの閣下が行ったり来たりする。

宗輔「寝てろって」

閣下「無意味な死ってさ、それ、俺たちの死に方だろ。毎日ただゴミを漁って、食えるもの食って、生きられなくなったら死ぬ。何も生み出さないし、何も残さない。その辺の猫にも劣る死に様」

三好「いいじゃない」

閣下「そんなもんをわざわざ金払って買うんだ」

三好「まあ、そう」

閣下「バカが！　美談なんか買う奴は全員馬鹿だ」

宗輔「からむなよ」

三好「そういうバカがいるから、美談作家がお金を稼げる」

閣下「宗輔、金がある奴は本当に生きてるって事を知らないんだ。だからこんな事に金を使う。だったらその金、俺たちにくれよ」

三好「だから、あげるって」

閣下「ありがとうございます！」

三好「そこはお礼ゆってくれるんだ」

閣下「先生、おねがいますよ。こいつはね、俺たちの希望の星なの。弄んだら承知しねえぞこのあばずれ！」

三好「ちよつとなに？！」

宗輔「閣下！　もうやめろって！！」

閣下「なんだお前、金持ちの肩持つのか。こいつらはな貧乏人から搾り取った金で生きてるような連中だぞ」

三好「私は違う。貧乏人に美談は買えないから」

閣下「宗輔……こんなはずじゃ無かった。こいつらがいなければ俺だつて……」

宗輔「わかったわかった」

閣下「俺は総理大臣だ。アー、くそ。酒が切れてきた……」

三好「じゃあまた買ってくれば？（金を出す）」

宗輔「ちよつと先生」

閣下「……どーも」

宗輔「閣下！ 飲み過ぎんなよ！」

閣下「あまり信用するなよ、こういう連中を」

閣下、去る。

三好「これで少しは落ち着いて話せる？」

宗輔「はい……」

三好、部屋の隅に積まれてる本の山を見る。

三好「これ、参考にしてる本？」

宗輔「あ、はい」

三好「太宰……三島……ドストエフスキー？」

宗輔「まあ、なんかいちおう」

三好「ダメ。もつとくだらないもの参考にしないで。ブブカとか、女性自身とか、週刊大衆とか。雑誌のほうがいいんじゃない？」

宗輔「何でそんな死に方したいんですか？」

三好「ん？」

宗輔「……『無意味な死』って。」

三好「……さあ？」

宗輔「さあって。自分のことですよ」

三好「自分の？ ああ、いやいや、違うのよ」

宗輔「え？」

三好「ごめんごめん。説明が足りなかったね。君に書いて欲しいのは私の美談じゃないの。依頼人は他にいます。私はまあ、貴方に仕事を斡旋してあげたとおもって」

宗輔「え、じゃあ俺は、誰の美談を書けばいいんですか」

三好「……おしえない」

宗輔「はあ？」

三好「無意味な死を書くんでしょ？ 変に情報があったら、絶対そっちに引つ張られるから。知らないまま書きなさい」

宗輔「……俺、弄ばれてます？」

三好「なに言ってるの」

宗輔「やっぱ金持ちって、変わってるんすかね」

三好「宗輔くんさ、生きるって何」

宗輔「はあ……」

三好「君たちは知ってるんでしょ？ 本当に生きるってこと」

宗輔「(ピンと来ず)……死なないようにするって事ですかね？」

三好「(しばし考えて)案外人間って、それだけじゃ生きられないもんよ。とりあえず今日見せてもらったのは全部使えないから。やり直し」

宗輔「えー」

三好、ノートを返し、

三好「アレできてる？ 花嫁と、屋久杉の。プロット清書したのある？」

宗輔、ゴミの山から慌ててファイルを取り出し渡す。

宗輔「え、これ採用ですか？」

三好「(ファイルの中身改めながら)バカ。これはあれだ。資料用」

宗輔「資料？」

三好「じゃあまた書いたら見せて。頑張らなきゃ、おにいちゃん」

宗輔「はい！」

三好「あ、あと締め切りは守ってよね。プロなんだから」

三好去る。

宗輔「メ切りっていつ？」

マル「(ぐあ……?)」

○4、各所点描

宗輔、古雑誌を拾い集め、一生懸命、原稿を書き続ける。
三好を捜し回る岡本。

ようやく三好を捕まえる岡本。
プロットでもなんでも良いからわたしてください！と、
身振り手振りで三好に頼む。

三好、宗輔のところでもらったプロットを岡本にわたす。
岡本、それを竹田にわたす。

岡本「来ました！ 原稿！」

竹田「ああ！ 良かった！！」

竹田、封を切って中の原稿を読み始める。

岡本「あああ、やっぱり先生は先生だ！ なんだかんだ言っていてここって
タイミングには間に合わせるんですよ！」

竹田「……なんだこれは」

岡本「え？」

竹田「なんだ、余命一ヶ月の花嫁って！ 屋久杉って！ 純白のウエデ
イングドレスに身を包み、恋人の胸の中で最期の時を迎えるのだ
ったって」

岡本「なんですか？！」

竹田「君の先生は、総理にどんな死に方させようとしてるんだ。なんで
総理がウエディングドレスを着て死ぬんだよ？！」

岡本「え?! そんな」

岡本、原稿を奪い取り、読む。

岡本「……違います。これ、先生の作品じゃありません。先生はこんな
文体じゃないし、こんな美談は書きません。それに、そもそも著
者名が違います！」

竹田「はあ? ……小泉宗輔? 誰だ?!」

岡本「わかりません！」

竹田「三好瞳子は、時間稼ぎのために、他の作家の、しかも全く関係な
い美談をよこしてきたってことか?!」

岡本「(土下座) 本当に申し訳ございません!!」

竹田「何をしている」

岡本「はい？」

竹田「はやく三好瞳子をよびたまえ！」

岡本「はい！」

岡本、電話をかけるが、出る気配がない。

竹田「出ないのか？」

岡本「……」

竹田「出ないんだな？」

岡本「すみません……。実は、この原稿を受け取ってから連絡がつかなくて、ご自宅にも戻られてないみたいで」

竹田「はあ？！ すぐに探して引っ張ってこい！」

岡本「探せと言われても、探せるところはもう探しました！」

竹田「何かないのか！ 手がかりは！」

竹田、岡本、原稿を覗き込む。

○5、歌舞伎町

道ばたに座り込んで一心不乱に美談を書く宗輔。

岡本、宗輔の前に立ち、ファイルを差し出す。

岡本「この美談を描いたのは貴方ですか？」

宗輔「あ？」

宗輔、美談を確認し、

宗輔「そうすけど。……あれ？」

岡本「三好先生とはどういうご関係ですか？」

宗輔「……あんた誰」

岡本「どういう関係なんですか。答えてください」

宗輔「それ、答えて俺になんかメリットあるんすか？」

岡本「メリット？」

宗輔、金銭を要求するジェスチャー。

岡本、自分の財布の中身を見つめ、逡巡するが思い切って札を出す。

宗輔、それを奪い取って、

宗輔「別に。タダの客つすよ」

岡本「客？ 客ってなんの？」

宗輔「(金を要求)」

岡本「(出す)」

宗輔「美談スよ」

岡本「美談って……。貴方が先生の美談を書いているって事ですか？」

宗輔「(要求)」

岡本「(出す)」

宗輔「あの人のじゃなくて、誰が他の奴の？」

岡本「ええ？ 他の奴って誰ですか」

宗輔「しらね」

岡本「(金を渡そうとするが)」

宗輔「それはほんとうにしらねーの」

三好現れる。

宗輔「あ、どうも」

岡本「……先生、何してらっしゃるんですか」

三好「うわ、なにしてんの」

岡本「それはこっちのセリフです。仕事ほっぽり出して何やってるんですか」

宗輔「これ、こないだ言われた通り直してみたんすけど」

三好「見せて」

岡本「先生」

三好「(宗輔の原稿見ながら) 原稿ならわたしたでしよ」

岡本「あんなもので竹田さんがごまかされる訳ないじゃないですか」

三好「なんでも良いから渡せっていったのはあつちでしようが……。:(宗輔に) 全然ダメ。意味出ちゃってる。くだらなくない」

宗輔「ええ。この件りとかどうすか？ ちょっと工夫してみたんすけど」

三好「ここが一番いらない」

宗輔「えー！」

三好「言ったじゃん、もうちょっと構成に気を遣わないと。細かなシー

ンのデイテイルより、全体を見た時のうねりを意識しないと」

岡本「ちよつと待ってください、え、何してるんですか？ その男に美談の書き方を教えてらっしゃるんですか？ え、どうして」

三好「納得できないなら、他の作家探してっていつといて」

岡本「そんなことできないのわかってるでしょう」

三好「そんなこと無いんじゃない？」

岡本「その男に書かせるつもりですか？」

三好「……」

岡本「なんで……。こんな大事な仕事を、歌舞伎町の浮浪者に?! そのままで行き詰まっているなら、私にお手伝いさせてくださいよ」

宗輔「え、こいつなんなんすか」

三好「気にしないで」

岡本「先生先生。私じゃダメなんですか？」

三好「……」

岡本「(いやな予感がして)先生、私の原稿。読んでくださいましたか？」

三好「原稿？」

岡本「渡したじゃないですか。私が書いた美談です」

三好「あゝ」

岡本「どうでした？」

三好「あー……ごめん、まだ読んでない」

岡本「え」

三好「ゴメンゴメン、忙しくて」

岡本「お渡ししたの三ヶ月前ですよ？」

三好「そんなこと言ったって忙しいもんは忙しいんだもん。あんたが一番よく分かってるでしょ」

岡本「こんな男に、美談の書き方を教える時間はあるの？ そんなに長いものじゃないですよ。どこにでもいる、五〇代男性の美談。三〇分もあれば読み終わるのに」

三好「わかったわかった。読む読む。データ送つといて」

岡本「だから……三ヶ月前に送りましたって」

三好「探すのめんどくさいからもちかい送って。最近もう、メールフォルダがグチャグチャで」

岡本「人には三ヶ月待たせておいて、自分は、メールボックスちよつと遡る手間も惜しむんですか？」

三好「うるさいなあ。文句があるならやめれば？」

岡本「はい？」

三好「そんな律儀に私の書生勤め上げなくたってさあ。仕事ならいくらでもあるでしょ。なんなら美談コーディネーター紹介しようか？」

岡本「ちよっとまってくださいよ……。私はこれまで10年先生にお仕えして」

三好「うん、だからさ。もう充分でしょ？ 私の紹介ならどのショップだって最高額で契約してくれるよ？」

岡本「いや、違うじゃないですか。私はそんな、コーディネーターに十把一絡げで売られる契約作家じゃなくて、先生みたいにフリーランスでお仕事戴けるようになるために、ここまで努力してきましたよ？」

三好「いや、フリーランスは厳しいよ。やめた方がいいよ。毎月しつかり給料貰えた方が絶対いいって」

岡本「先生の後継者として、デビューさせて下さるっていったじゃないですか」

宗輔「え、ちよっとそれは聞き捨てならないすね」

三好「(宗輔に) まあまあ、ちよっと黙ってて」

岡本「(宗輔に) あんたはなんなんですか！」

宗輔「三好瞳子の跡は、俺が継ぐんで」

岡本「……」

宗輔「俺が、継ぐんで。つすよね？」

三好「(曖昧に) はは」

岡本「あ、それ、先生の万年筆……」

三好「あー……ゴメンね？」

岡本「へ？」

三好「あなたを後継者に？ てか、私そんなこと言ったかな？」

岡本「いや……」

三好「ゴメンちよっと酔っ払ってたかも」

岡本「……いやいや……」

三好「悪いけど、その話、忘れてくれる？」

岡本「……いやいや……いやいやいや……」

三好「ゴメン、ちよっと場所変えようか」

宗輔「うちでいいですか？」

三好「うーうーん。まあいいか……。竹田さんに言っというて。ほんとのデッドは守るからって」

宗輔と三好、去る。取り残される岡本。
マルも岡本を気にするようにしてその場に残る。
そこに竹田がやってくる。

○6、三好のオフィス

竹田「ほんとのデッドはもう過ぎてるんだよ!!」

岡本「すみません……」

竹田「依頼人がこの日に上げろって言ったら、それがほんとのデッドラインだよ！　なんだその隠し締め切りがあるみたいない方は！」

岡本「すみません……」

竹田「その上歌舞伎町の浮浪者に、総理の美談を書かせてる？　なんで！」

岡本「わかりません……」

竹田「だから言ったんだ……。腹を切らせろって。君が甘やかすからこんな事になったんだぞ」

岡本「すみません……。私が、責任を持って先生のお仕事を引き継ぎます」

竹田「なんで」

岡本「へ？」

竹田「総理の美談はその、浮浪者が書くんだろ？　だったらそれでいいじゃないか」

岡本「ええ？」

竹田「ま、さしずめ、浮浪者ならゴーストライターやらせても名前がわからないでも思ったんだろ。焼きが回ったよ、三好瞳子も。ま、こつちとしては三好名義の原稿さえあれば問題ない。君、サポートしてやってくれよ」

岡本「私がサポート？」

竹田「そりゃそうだろ。君、三好瞳子の書生なんだから」

岡本「そうですね……」

竹田「ほんとのデッドには間に合わせなさいよ」

岡本「やつぱり、ほんとのデッドがあるんじゃないですか……」

岡本、竹田去る。
宗輔が駆け足で現れる。

〇7、高架下

宗輔「おい、マル濡れるぞ」

宗輔、マル、舞台奥に身を寄せる。

宗輔「また没くらったわ……。なんだろなく。無意味でいいって言う割には色々言ってくるんだよな」

マル「(今日はもう書かないの?)」

宗輔「今日はもう書かないよ。あんまりこっちに時間かけると、喰いもん集める時間が無くなる……。と思ったんだけど、雨だなあ」

マル「(雨だねえ)」

宗輔「さっむー……」

宗輔、ポケットから巾着袋を取り出して弄ぶ。

宗輔「ここでこうやって雨宿りしてるとさあ、初めて歌舞伎町に来たときのこと思い出すよ。お前を抱えてさあ。寒かったな」

宗輔、マルを自分の上着の中に入れてやる。

そこに、傘を差した岡本がやってくる。

岡本、傘を落とす。と、その手にはナイフが握られている。

岡本、宗輔に襲いかかる。

高架を電車が走る。

岡本「返して下さい！ 先生の万年筆！」

宗輔「はあ?!」

岡本「先生から盗んだんでしょ！ 返しなさい！」

轟音の中、宗輔と岡本もみ合いになり、宗輔、勢い岡本を刺してしまう。

絶命する岡本。

宗輔、狼狽え、岡本の身体をまさぐり携帯電話を取り出す。
宗輔、電話をかける。
宗輔の姿にクロスするように。浮浪者B、Cが現れる。
電話は三好に繋がる。

三好（声のみ）「もしもし……」

〇8、三好のオフィス

手話ニュースが始まる。

マルはキャスターとしてニュースを伝える。

浮浪者たち、ゴミあさりながら彷徨いながら岡本の死体にボロを纏わせる。

岡本、浮浪者Dとなる。

ニュースの中、宗輔はける。

ニュースの間、浮浪者たちは彷徨い続ける。

手話ニュース

「おはようございます。7時のニュースです。昨晚、新宿で建設中のビルの足場が崩れる事故があり、通行人が一名死亡しました。死亡したのは美談作家の岡本美由紀さん。落下物に気付いた岡本さんは、当時一緒にいた美談作家の三好瞳子さんを守ろうと三好さん突き飛ばし、自ら足場の下敷きになりました。岡本さんは、三好瞳子さんの後継者として将来を嘱望されていた美談作家であり、関係者からは岡本さんの死を悼む声が寄せられています。それを受けて三好さんは「後継者は彼女しかいないと思っています。若い才能を失った事が悔しく、今は言葉ありません」とコメントしています。」

浮浪者C（三好）はよき所で先にはける。

宗輔と三好、が現れるのにクロスして浮浪者B、Dはける。

そこは三好のオフィス。

宗輔「本当に……あんたが書いた通りにニュースになってる……」

三好「だから言ったじゃない、大丈夫だって」

宗輔「あんた、まさかいつもこんな事？」

三好「まさか！」

宗輔「すげえ……。これが出るなら、いくらでも人殺し放題じゃん。どれだけ殺したって、美談一つでなんとでもなる」
三好「馬鹿な事考えるのはやめなさい。今回はたまたま。私が書いたからなんとかあったの」
宗輔「すげえ……。美談作家、すげえ……」

竹田が、新聞片手にやってくる。

竹田「どうも」

三好「ああ」

竹田「この度はご愁傷様でございます。残念でしたね」

三好「わざわざどうも」

竹田「訃報には慣れているつもりですが、やはり、自分より若い方がなくなるのは応えませぬ」

三好「竹田さんでもそんなこと考えるんだ」

竹田「なんですか人を冷血漢みたいに。岡本君には随分世話になった。貴方と話しているよりずっと、彼女と話している方が多かったですから」

三好「それはそうかもねー」

竹田「ああ、君が新しい書生か」

宗輔「え？ 書生ってなんすか？」

竹田「岡本君から聞いているよ。先生から相当大きな仕事を任されてるんだらう？」

宗輔「あ、まあ、そうですけど」

三好「うんまあ、書生って事で」

竹田「なんだ君、酷い格好だな。こういうところにくる時は着替えてきたまえ」

宗輔「はあ、すみません……」

竹田「岡本君、君にかなり嫉妬していたよ。なんで三好先生が君のような人間をつってね」

宗輔「はあ……」

竹田「彼女、それはもう三好先生を信奉していてね。生まれ変わったら先生の文字になりたいとまで言っていた」

三好「そういうところがねえ……」

竹田「そういう意味では、師匠の書いた美談で人生の幕を閉じるというのは、彼女にとって最良の死に様だった事だらう」

三好 「十年仕えてくれた彼女に、ようやく恩返しができてホッとし
ましたよ」

竹田 「それはそれは」

三好 「ええ」

竹田 「良くもいけしやあしやあと」

三好 「はい？」

竹田 「やったな君たち」

宗輔 「え？」

竹田 「世間はごまかされても、私はごまかされないぞ？ 私は岡本君に
仕事を頼んでいた。他でもない、君のサポートをだ。彼女は文句
も言わずそれを引き受けた。もちろん、自分の死期が迫っている
だなんて話は一切してなかった。それがどうだ。あっさり死んだ。
しかも三好瞳子の美談付きで。そして後釜にはあっさり君が納ま
っている。どういうことかね」

宗輔 「あー……」

竹田 「一体何を考えてる！ こんな事は、美談作家として最も恥ずべき
行為だぞ！」

宗輔 「先生これまじくはないすか」

三好 「あー……」

宗輔 「(三好に) 大丈夫っていったじゃないすか！」

三好 「大丈夫だって」

宗輔 「どこが？」

竹田 「君たちはアレだな、取り繕おうという姿勢すら見せないんだな」

宗輔 「はあ、何のことでしょうか」

竹田 「もうおそいよ！」

三好 「どうぞ、通報して下さい」

宗輔 「ちよっと」

竹田 「ああ？」

三好 「「これは……問われるとしたらどういう罪なんだろ。殺人幫助？
犯人隠避？ まあ、とりあえず怒られるはするよね、絶対」

宗輔 「いやいや」

三好 「君はシンプルに殺人だな」

宗輔 「あれは正当防衛だって！」

三好 「詳細は裁判所で話そうか」

宗輔 「ちよっと！」

三好 「いいですよ？ 出るとこ出てもらって」

竹田「全くどういふ神経してるんだ」

三好「貴方にそれだけ正義の心があるなら」

竹田「……」

三好「私たち、随分長いこと一緒に仕事してきたよね。貴方の紹介で私が美談を書いた政治家って……何人ぐらいいたかな？（指折り数え）あー、両手じゃ足りないなあ。ちよつと、竹田さんも一緒に数えてよ」

竹田「……」

三好「みんな、あの世で悲しむだろうね。自分の美談を書いた作家が犯罪者だなんて。でもまあいいか、死んでるし。死んだ人間は文句言えないもんね。あ、竹田さんってスピリチュアル信じる系？私は一切信じない系。あー、でも、竹田さんの評判は落ちるかも知れないね。なんせ犯罪者と関係してるんだから。残念だね。今度の選挙でようやく犬養総理の地元から立候補出来る事になったのにさ。総理大臣になるって夢もここで終わりか。いやでもそんなこと、正義の前には些細なことですよ。さ、どうぞ、いつでも」

竹田「……」

三好「ほらね？」

宗輔「は？」

三好「本当に通報するつもりなら、わざわざ会いに来ないって。ねえ？」

竹田さん

竹田「……あーうん」

宗輔「え」

三好「やだなーもう。長いつきあいじゃない。言いたいことがあるならスパッといっちゃってよ。ほら」

竹田「うーーん」

三好「なに」

竹田「いや、ここに来る時に考えてた流れと随分違っちゃったからね？ どういったもんか、言葉が出てこなくて」

三好「ああ、じゃあ、どうぞ？ 考えてきた流れでやってもらって」

竹田「ああ、流れで？」

三好「さっきの続きからはじめてもらって」

竹田「ああ、悪いね……。〔気を取り直して〕こんな事は、美談作家として最も恥ずべき行為だぞ！ こんな事が許されると思ってるのかね、君たちは」

三好「なるほどなるほど」

竹田「いいか？ この件を黙っていて欲しければ、私に協力したまえ」
三好「そういう流れね」

竹田「ちよっとやりにくいな」

三好「ああ、ごめん。黙っとくわ」

竹田「(ポケットからメモを取り出し)ここに書いてある人物の美談を、私が言う通りに、私が望んだ期日までに、必ず書き上げるんだ。いいか、わかったな」

三好「……」

竹田「……終わりです」

三好「ああ、おわりか」

竹田「私の意図は充分伝わっただろう」

三好「ちよっと見せて」

三好、竹田からメモを受け取り、見る。

三好「なるほどね……」

竹田「ここ一年から三年以内に死期が迫っていて、かつ、三好瞳子に美談を書いて欲しいと望んでいる政治家、軍人、資産家だ。君が美談を書くと言えば、彼らは喜んでそれを受け入れるだろう、だから」

三好「私は彼らが、貴方に都合のいいタイミングで、貴方に都合のいい理由で死ぬように、美談を書けばいいわけね……。竹田さんも五〇を過ぎて焦りが出てきたね」

竹田「まあ、そんなところかな。じゃ、頼んだよ」

三好「ごめんなさい」

竹田「ええ！」

三好「だって忙しいんだもん。無理だよー、こんな、十一人もさあ」

竹田「それは無いだろ、この期に及んで」

三好「彼に書かせるから」

宗輔「俺？」

竹田「……ゴーストってことか」

三好「ううん。彼の名前で書かせる。よかったな。デビューだぞ」

宗輔「ええ？」

竹田「いやそれはむちゃだろ。こんなこの馬の骨ともしれない、実績もない作家じゃ、そこに書かれている連中は納得しないぞ？」

三好「私ね、この子に跡を継がせようと思ってるの」

竹田「彼に?!」

三好「それだなとかお客さん達に納得して貰えない？ 『あの、三好 瞳子の後継者が代わりに引き受けて下さるそうですよ！』とかなんとか言って丸め込んでよ。得意でしょそういうの」

竹田「いやあー……」

三好「ちゃんと責任持って監修入れるから」

竹田「しかしね……」

三好「大丈夫。ちゃんと竹田さんが総理大臣になれるように書かせるから。ね？」

竹田「うーん……」

宗輔「いや、でもあの、今先生に頼まれてる美談は……」

三好、竹田を見る。

竹田「……まあ、そっちの方は一端置いといて、さきに十一人の方を進めてくれたまえ。そこに書いてある十一人が逝くとなると、かなり段取りが変わるからな。」

宗輔「はい！」

三好「今書いてるやつも、プロットはちゃんと進めておくのよ」

宗輔「はい！」

三好「はいじゃあ行った」

宗輔「はい！」

竹田「待った！ これ、先払いの経費だ。何かと物入りだろうから（一

○万程渡す）」

宗輔「(手にした事のない大金に) あ、あ、あ、あ、あ……」

竹田「服も新しいものにするんだぞ」

宗輔「はい！」

竹田「おいちよっと……」

宗輔走って出ていく。

マルはこっそりその場に残り、

竹田「領収書」

三好「事務所に送っとく」

竹田「ん。それにしても、どうして彼なんだ。岡本君じゃなく」

三好「主人公っぽいから？ どん底から這い上がるサクセスストーリーのさ、そういう感じあるじゃん彼。岡本はいい奴だったけど、モ

ブキヤらっぱいんだよね」

竹田「本当に岡本君は不憫だな。なんのために死んだんだか……」

三好「やだ。あの子は尊敬する師匠を守る為に死んだのよ？ 三好瞳子の後継者って言う未来をかなぐり捨ててまでね」

宗輔「おい、マル！」

宗輔は、はしゃいだ様子で舞台を大回りで走り回る。

三好、竹田、はける。

○9、宗輔の住処

宗輔、舞台を大回りで走るうちに、その手はノートと、資料が入った封筒、大きな買い物袋を、持っている。

宗輔。走り込んでくる。

宗輔「閣下！ 閣下！（閣下が出てくるまで呼ぶ）」

閣下、ゴミ山の影から顔を出し、

閣下「なんだようるせえなあ」

宗輔「仕事仕事！ 仕事貰った！」

閣下「あの女先生からか」

宗輔「違うんだよ！ なんか、政治家の……偉そうな奴から！」

閣下「だからうるせえって！」

宗輔「なんだよ」

閣下「……悪い。酒が切れて、ちよつとかりかりしてて」

宗輔「最近多いな、そういうこと」

閣下「気にする事じゃない」

宗輔「あそう」

閣下「じゃああれか？ なんだ、もう、『無意味な死』とかいう美談は書き上げて、晴れて三好瞳子の後継者になったってことか」

宗輔「いやそれはまだ全然なんだけど」

閣下「はあ？」

宗輔「でもなんか、先にデビューできるらしい。しかも客は全員超一流の政界人！ しかも十一人！」

閣下 「なんだそれ」

宗輔 「(聞いておらず) やっぱ三好瞳子はスゲえよ。目の前でどんどん交渉してさ、あれよあれよと俺のデビューが決まったんだよ。賢そうな背広のおっさんが何にも言い返せないでやんの」

閣下 「……そんなうまい話があるかね」

宗輔 「まだそんな事言ってるのかよ……。喜べよ。金が手に入るんだぞ」

閣下 「……じゃあな、宗輔、ちよつと用立ててくれねえか？」

宗輔 「は？ また赤ん坊が捨てられてたのか？」

閣下 「そういうあれじゃなくて」

宗輔 「(ピンと来て) ダメだ」

閣下 「宗輔」

宗輔 「どうせ酒だろ」

閣下 「違う違うそう言うんじゃないや無くて。頭が痛いんだ……痛くて、痛くてさあ、酒飲まないと痛いんだよ」

宗輔 「酒飲むから痛いんだろ？」

閣下 「ああわかった！ うるさい！」

宗輔 「なあ、閣下最近おかしいって。ゴミあさり行ってるか？」

閣下 「ああもういらんいらんいらん。金ならいらねえから」

宗輔 「三好先生から小遣いもらってるだろ。なに買ってるんだ？」

閣下 「なににも買ってない」

宗輔 「だったら金あるだろ」

閣下 「わかったって！」

宗輔 「……あっそう」

閣下、頭が痛いのか、煩わしそうに宗輔から離れる。

宗輔 「なあマル、ギャラ入ったら何喰いたい？ 服も買おうな。銭湯も行く。美容室とか行ってみるか？」

閣下 「……すっかり金持ち気分だな」

宗輔 「なに……」

閣下 「お前さ、忘れてるんじゃないのか？ 金持ちから巻き上げたその金で、自分が何をしたかったか」

宗輔 「忘れてねえよ」

閣下 「お前はその金で。歌舞伎町中の浮浪者を救うんだろ。マルの喉だつて、直してやるんだろ？ なにが服だ、なにが美容室だよ」

宗輔 「仕事の為に必要なんだよ」

閣下 「信じていいのか」

宗輔 「は？」

閣下 「お前の事。心配なんだよ」

宗輔 「なにが」

閣下 「誓えるか？ 金持ちになっても俺たちの事見捨てないって」

宗輔、脇に置いておいた買い物袋をひっくり返すと、大量の粉ミルクが転げ出してくる。

閣下 「……」

宗輔 「仕事の経費で買った。服買えって言われてもらった金で、粉ミルク買った。満足か」

閣下 「……ミルクだけ？」

宗輔、ポケットからウイスキーボトルを取り出す。

閣下、飛びつくようにそれを受け取って飲む。

宗輔 「ゆっくりのめよ！」

閣下 「(ひとごちついて) わるかったよ。ちょっと頭が痛くて、思ってもいない事を言っちゃまったんだ」

宗輔 「わかってる……」

閣下 「(粉ミルク拾いながら) よかったな、仕事決まって。誰の美談を書くんか。そんな十一人も」

宗輔 「ん。よく分かんないけど、いちおう資料貰った」

宗輔、閣下に資料を渡し、自分はゴミ山で新聞を探す。

宗輔、閣下、努めていつもの気安い二人を演じている。

閣下 「井上準之助……団琢磨……」

宗輔 「聞いたことはあるんだよな……この辺の新聞に載ってたかな」

閣下 「かーっ！ ろくでもねえ連中じゃねえか」

宗輔 「あ、そうなの？」

閣下 「いいか宗輔、これだけ俺たちが貧しいのは、全部こいつらのせいだ。殺されて当然だな」

宗輔 「いや違う違う。殺す訳じゃねえって。もう死ぬ時期は決まってて、

それに合わせて俺が美談を書くだけ。人聞きの悪いこと言うなよ」
閣下「金持ちには2種類ある。金持ちから金を巻き上げる金持ちか、貧乏人から金を巻き上げる金持ちか。不思議な事に貧乏人から金を巻き上げる金持ちのほうがおおい。なんでだ！ 金がある所から持ってけよ！ 金持ち同士でつぶし合え！」

宗輔「おお、それはそうだな」

閣下「宗輔、こいつらはな、貧乏人から金を巻き上げるタイプの金持ちだ」

宗輔「そうなんだ」

閣下「ろくでもねえことかいちまえよ。犬に食われて死んだとか、そういうことかいちやえよ」

宗輔「だめだつて。変な事書いたら金もらえなくなる」

閣下「フム。お前は、金持ちから金を巻き上げるタイプの金持ちだな。許す」

宗輔「まだ金持ちじゃねえよ」

閣下「反論とはなんだ！ 私は、第四〇代日本国内閣総理大臣であるぞ！

頭が高い！」

宗輔「また始まったよ。もう寝ろ」

閣下「やめろつはなせー。下賤の者が何をする！」

宗輔「くそ！ 年寄りのくせに力が強い。ほらもうねろつてえ」

宗輔、閣下を横たえる。

閣下「アレが全部いけねえよ。流行病がさ。みんながみんな長生きできねえってなったとたんに、いい加減になったんだなあ。生きる事より死ぬ事のほうがおおごとになったんだ。ばかだろ」

宗輔「はいはい」

閣下「宗輔、宗輔お前はさ、そういう馬鹿な金持ちからたくさん金をぶんどれよ？ な？ 金持ちになっても俺たち貧乏人あいてに商売するような金持ちには絶対なるなよ？」

宗輔「心配すんなつて。貧乏人は美談なんかかわねーんだから」

閣下「そうだ。俺たちは賢い！」

宗輔「そうだ。俺たちは生きるつてことを誰よりも一番よくわかつてる」

閣下「そうだ！」

マル「(なんで、人は美談を買うの?)」

宗輔「さあ」

閣下「なんだ？ マルが何か言ってるのか」

宗輔「なんで美談を買うんだってさ」

三好、やって来る。

入れ替わりに、閣下は去る。

○10、新宿御苑

三好、宗輔のノートを読んでいる。

三好「なんで美談を買うか？」

宗輔「はい」

三好「むずかしいこと聞くね、妹さんも」

宗輔「まあ」

宗輔落ち着かない。

三好「落ち着かないなあ！」

宗輔「目の前で読まれると緊張するんすもん」

三好「いい加減慣れな。……読んだよ」

宗輔「どうすか？」

三好「全然ダメ」

宗輔「ええー？」

三好「なに君、全然うまくならないじゃない。前大蔵大臣の美談の締め切りもうすぐなんですよ？」

宗輔「まあ……」

三好「いや参ったなくこれじゃ私が竹田さんに怒られる」

宗輔「え、そんなに？」

宗輔、三好からノートを取り返し、原稿を直し始める。

三好「あのさ、これ、私がお願いしてるくだらない美談とは違うんだから。ちゃんとした、ドラマチックで、身のある美談を書いてくれないと困るんだけど」

宗輔「急にそんな事言われたって」

三好「これさあ、大臣の行動に全然一貫性が無いじゃない。主人公が何故そうしたのか、常にわかるようにしなきゃダメだよ」

宗輔「政治家がなに考えてるかなんてわかんねえっすよー」

三好「それを書くから金がもらえるんだろうが」

宗輔「あー……」

三好「まず、人の欲望を理解しなさい」

宗輔「欲望すか」

三好「欲望を満たすために、人は動く訳だから。で、その人がどう動くのかうって言う軌跡が物語になる。でしょ？」

宗輔「はい」

三好「だから全体を貫く大きな欲望があれば、自然と起承転結が生まれ、物語が完成する」

宗輔「欲望ね」

三好「で、人が面白いと思う物語っていうのは、どれだけ登場人物の欲望に共感できるかに関わってる。だから、登場人物が持つ欲望は、なるべくシンプルで、根源的なもの方がいいの。お腹減った、眠たい、セックスしたい。直感的にわかるものがいい。世界平和を望まない人はいても、食欲を否定する人はいないでしょう」

宗輔「なるほど……」

宗輔、一生懸命メモを取っている。

三好「じゃあ、食欲睡眠欲性欲にならぶ、人間の一番根源的な欲望はなんでしょーか」

宗輔「ええ？ 金とか？」

三好「それはあくまで二次的なものでしょ？ 何かの欲望を満たすためのお金なんだから。お金そのものだけが欲しいわけじゃない」

宗輔「あー、名声が欲しいとか」

三好「近いっちゃ近いか……。これは、人間の恐怖と深く結びついた欲望です」

宗輔「……死にたくないとか、長生きしたいとか？」

三好「それもまあ、含めてのって感じかな？」

宗輔「……」

三好「わかんないか」

宗輔「わかんないスね」

三好「人間の三大欲求にならぶ根源的欲望は……自分が生まれてきた事には意味があったと思いたい。っていう欲望」

宗輔「生まれてきたことには意味があったと思いたって欲望かあー。

え、もうちよつとヒント貰えます？」

三好「いや答えだよ。今のが答え」

宗輔「はい？」

三好「生きる意味が欲しいのよ。人はさ、不安なの。自分はなぜ生きるんだろう、なんで生まれてきたんだろう。自分がこの世界に存在することには、なんの意味もないんじゃないのか。進化しすぎた脳みそで、みんな生まれてきた意味を探してる。生まれてきた意味を獲得するために生きてると言ってもいい」

宗輔「はあ……」

三好「その上この数十年で、みんな短命になったじゃない。働き盛り、まだまだこれからって時に死んでいくでしょ。そうなるかどうか？ 自分はこの人生でまだ何もし得てない。社会に貢献することも、誰かを幸せにすることも、できているかわからない。このまま、何者でもないまま、生まれて死ぬのか？ 一体なんのために生まれてきたのか。……だから、人は美談を買うの」

宗輔「……ああ、その話か」

三好「美談作家の仕事は、その欲望に応えること。死んでいく人に、美しい物語で、あなたの人生には意味があったと思わせること」

宗輔、何かひらめいたようにノートに美談を書き始める。

はじめはたどたどしい筆つきが、徐々にスムーズになっていく。

その様子を見届けると、三好ははける。

宗輔が猛然と書き進めていく背後に、三好と入れ替わるように竹

田が現れ、細々と指示を出している。

宗輔、さらに筆のスピードを上げる。

竹田、満足そうな顔をして去る。

ニュース音声

「こんばんは。8時のニュースです。前大蔵大臣の井上準之助さんが射殺されました。井上さんは選挙応援演説のために訪れていた本郷の駒本小学校入り口付近で、三発の発砲をうけ被弾。犯人はその場で取り押さえられたとのこと。犯人は、井上日召をリーダーとするテロ集団の一人で、警察は今回の犯行も組織的なテロの可能性もあるとして調べを進めています」

ニュース音声

「こんばんは。11時のニュースです。実業家の団琢磨さんが三井銀行本店前で射殺されました。犯人は段さんを玄関付近で待ち伏せし、犯行に及んだとのこと。警察は先日起きた井上準之助前大蔵大臣射殺事件との関連を調査中です」

ニュース音声のあいだに、浮浪者C、Dがさまよい出てくる。
(浮浪者Bも間に合えば)

宗輔一度はける。

浮浪者たち、テーブルを出すと、不安げにあたりの様子を見回し身を寄せる。

浮浪者Cが、Dのボロを引きはがすと、レポーターとなる。

○11、宗輔の新オフィス

レポーター、レビクルーがいるのでレポートをはじめ
る。浮浪者C、引きはがしたボロを持つてはける。

レポーター「今日は話題の若手美談作家、小泉宗輔先生の六本木のオフィスにおじゃましてます。先生本日はよろしくお願いいたします」

宗輔、小綺麗な格好で出てくる。

宗輔「お願いします」

レポーター「素敵なオフィスですね。どういったところにこだわってらっしゃるんですか？」

宗輔「ああ、やっぱり作業中は集中したいので防音設備と……この景色ですね」

レポーター「わあ！ 見てください！ 東京の街が一望できます！」

小泉先生と云えば、デビュー作の井上準之助前大蔵大臣と、実業家の団琢磨さんの美談が大変話題になりました。異なる人物の美談を、連続もので書くという構成はもちろんのこと、テロリズムには決して屈しないというお二人の崇高な精神性が非常にセンセーショナルでした」

宗輔「そうですね。2つの美談を関連づけたのは、単純に井上さんと団さんご希望の命日が近かったということから発想を得ました。

お二人は生前も親交があったので、僕の提案にも非常に積極的に乗ってくださいって」

レポーター「そうなんですかあ。テーマ選びはどのように」

宗輔「やはりお二人とも大きな偉業を成し遂げてらっしゃる方ですので、普通の亡くなり方では彼らの功績を充分に表現することは出来ないと」

レポーター「ええ」

宗輔「だからこそ、彼らの偉業に対するアンチテーゼをぶつけてみました。大いなる作用には、大いなる反作用が伴います。その部分がしっかり表現することでかえって、彼らのなしかえたことの偉大さが伝わるんじゃないかと」

レポーター「小泉先生と言えば、パソコンを使わないという古風な執筆スタイルも話題ですが」

宗輔「やはり作家たるもの、紙とペンだけで世界を生みだすべきでしょう。金もかかりませんし」

レポーター「金？」

宗輔「ああいえ」

レポーター「なるほどですねえ！ 次回作のご予定なんかは？」

宗輔「もちろんありますよ。ありがたいことにたくさんのご依頼を戴いてますから。きっとこれからも僕の美談が、新聞、ニュースを賑わし続けるでしょう」

レポーター「とっても楽しみです！ やはりその大胆な発想力は、師匠の三好瞳子先生から受け継いだものなんでしょうか？」

宗輔「あー……先生には申し訳ないんですが、これは僕の本来の資質によるところが大きいと思います」

レポーター「あー、なるほどお！」

宗輔「僕は歌舞伎町の浮浪児として育ちました。そこでの経験が、僕にはないインスピレーションを与えてくれているんだと思います」

レポーター「小泉先生と言えば、その壮絶な人生にも注目が集まっていますよね？」

宗輔「壮絶だなんて」

レポーター「そういう先生の境遇に共感する国民は大変多いと思います！」
宗輔「残念ながら、僕のような境遇で生きる人たちはたくさんいますからね」

レポーター「そんな皆さんに、小泉先生からメッセージいただけますか？」

宗輔「未来は、変えられる！」

レポーター「ありがとうございます！ 最期に、先生が美談作家を目指すきっかけでもある、妹さんのお話について聞かせて戴けますか？ 発声障害をお持ちの妹さんの治療費を稼ぐために美談作家を目指したとか……」

閣下がやってくる。

閣下「はいはい、お話はそこまでで」

レポーター「なんですかこの方!？」

宗輔「……閣下」

レポーター「閣下?!」

宗輔「閣下、悪いけど今は外で待っていてくれよ」

閣下「なんだ宗輔お前。マネージャーを邪険にしようってのか」

レポーター「マネージャーさん？ すいません今撮影中で」

閣下「ああ?!」

レポーター「酒くさ!」

宗輔「すみません今追い出しますんで!」

レポーター「ああ、ええ」

閣下「ホラ！ 宗輔先生は仕事が詰まってるんだよ！ さっさとかえんな!」

宗輔「おい!」

閣下「マネージャーのいうことがきけないってのか!」

レポーター「ああ、わかりました！ 今日のところはひとまず!……ああ、あとひとつだけ!」

閣下「オイ!」

レポーター「三好先生の引退時期についてお伺い出来ますか?!」

閣下「しつこいぞ!」

レポーター「小泉先生ご活躍の傍ら三好先生の新作が発表されなくてしばらくたちますけど、」

閣下「(遮るように) ほら行った行った!」

レポーター「小泉先生が正式に三好先生の跡を継ぐのはいつ頃に……」

閣下「そんなもんは三好瞳子に聞くんだな」

レポーター、閣下に押し出されるように退場する。

閣下「ボクって……ボクの美談ってそういうガラか？」

宗輔「うるさいな」

閣下 「インタビューだなんて、すっかり売れっ子じゃねえか」

宗輔 「……言ったよな。六本木のオフィスには来るなって」

閣下 「仕事が忙しいだろうと思ってよ。掃除でもしてってやろうかなってさ」

宗輔 「いいよ……。閣下が動き回ったら返って汚れる」

閣下 「酷い言いぐさだなおい」

宗輔 「なあ今俺大事な時期なんだよ。閣下みたいなのにくろちよろされると、イメージ悪いからさ」

閣下 「宗輔、この部屋、酒おいてないのか？ 酒」

宗輔 「もう帰れって。車呼んでやるから」

閣下 「ほい」

閣下、掌を差し出す。

宗輔 「……金ならこないだよっただろ」

閣下 「あんなんじゃたりねえよ」

宗輔 「はあ？ いままでどんだけ金渡したと思ってんだ？」

閣下 「今、歌舞伎町すげえ大変なんだよ。地方の盛り場が全部だめになっちゃっただろ？ それで全国から浮浪者共が集まって来ちゃってよ。喰いもんがいくらあっても足りねえんだよ」

宗輔 「それは知ってるけど……」

閣下 「お前誓ったよな。金持ちになっても、俺たちの事見捨てないって」

宗輔 「限度つてもんがあるだろうが。俺はな、打ち出の小槌じゃねえんだぞ！」

閣下 「はーなるほど」

宗輔 「何だよ」

閣下 「惜しくなったか、金が」

宗輔 「は？」

閣下 「自分1人喰えるようになったらもう俺たちの事はどうでもいいってか！」

宗輔 「そういうことじゃなくて」

閣下 「この裏切り者！」

宗輔 「いいから帰れって！」

閣下 「こないだ拾った赤ん坊な、アレ、死んだぞ」

宗輔 「は……」

閣下 「ミルク買う金がねえんだ。そら死ぬだろ。最期には重湯を飲む元気もなくなつてな。お前が金に目が眩んで俺たちのこと見捨てたからだよ。お前がああ赤ん坊を殺したんだ」

宗輔が閣下に飛びつく。
しばしもみ合いになり、宗輔閣下を投げ飛ばす。

宗輔 「ふざけんなよ！ お前らだろ？！ え？ お前ら、俺が渡した金どうしたよ！ 全部、酒と博打クスリに溶かしやがって！ 粉ミルクだって、自分たちでくちまっただろ！」

閣下 「宗輔、本当に喰うもんがねえんだ」

宗輔 「俺はな、そんなことのために金渡してたんじゃないんだよ！ 赤ん坊を殺したのはお前らだろうが！」

閣下、尻餅ついたままへっへっへと笑っている。

宗輔 「金を稼いでみて分かった事がある。やっぱりさ、稼げない奴には稼げないだけの理由があるよ。チャンスはさその辺にいくらでも転がっているのに、それに手を伸ばす努力もしない。俺はしたよ、その努力を。どんだけ原稿にだめ出しされても、食らいついて書き直して。あんたはどれだけのことしたんだよ。努力した人間を嫉んで、その努力のおこぼれに預かって、さらにたかって……足引っ張って。閣下さ、なんで自分がこんなに惨めなところになつてるか考えた事ある？ 自業自得だって思わないのか？」

閣下 「……」

宗輔 「そんな奴にさ。なんで俺が金渡さなきゃならねえんだよ」

閣下 「私は第40代内閣総理大臣であるぞ！」

宗輔 「黙れよこの酔っ払いが！」

閣下 「俺が総理大臣だったら、こんな国、ぶっ壊してやる」

宗輔、ポケットから巾着を取り出して閣下に投げつける。

宗輔 「今うちにある現金それだけだから。俺は今、キャッシュレスだからねー！」

閣下 「……」

宗輔 「これで最後にしてくれ」

閣下 「……マルはどうした。治してやったのか」

宗輔 「そのうちちゃんとしようと思ってるよ」

閣下 「そのうちね（笑）」

宗輔 「もつと金がいるんだよ。お前らにバカみたいに注ぎ込んだからな！」

閣下 「そうかそうか」

宗輔 「そのうち、ちゃんとする。ちゃんと三好先生の言うとおり『無意味な死』ってのを書き上げて、正式に先生の跡を継いだら……そうになったら絶対」

閣下 「なんだお前！ まだあとつがせてもらってないのか！」

閣下 「うるせえな。もうすぐなんだよ。俺にはわかってるから」

閣下 「そんなときが来るのかねえ」

宗輔 「は？」

閣下 「……あの女、ほんとにお前に跡継がせる気あるのか？ このままだブルブル引き延ばして、なかったことにしようとしてるんじゃないのか？」

宗輔 「まさか」

閣下 「惜しくなったんじゃないの、金が。お前みたいにな」

宗輔 「……俺はそんなじゃない」

閣下 「まあいいや……。お前のとこに現れるのはこれが最期にしてやるよ。はなからそのつもりだったしな」

宗輔 「は？」

閣下 「どうせ死ぬなら、最期までお前にたかりつくしたかったな」

宗輔 「え、嘘」

閣下 「おお」

宗輔 「もう……？」

閣下 「もうって。他の連中よりは随分長く生きたけどな。生きすぎたぐらいだ」

宗輔 「余命診断行ったのか？」

閣下 「そんな金ねえよ。でもさ、わかるだろそういうのは。自分で」

宗輔 「病院代ぐらいだったら俺……」

閣下 「いらねえよ。金で時間が巻き戻せる訳じゃあるまいし」

閣下、去る。

浮浪者C、D現れる、机を片付ける。

宗輔、浮浪者の雑踏の中を、三好を探してさまよう。

〇12、歌舞伎町

宗輔、浮浪者Cのボロをはぎ取るとそれは三好。

宗輔「めっちゃめっちゃ探しましたよ！ 何やってるンスカこんなところで」

三好「いやなんか最近この街が気に入っちゃってさあ。いっそ住んじゃおうかなとか思って、家探し？」

宗輔「歌舞伎町に？ やめたほうがいいっすよ。クサイし、汚いし、危険だし……」

三好「君、わざわざ六本木の方まで引越したんだって？ すっかり売れっ子じゃない。私の跡なんか継がなくてもいいくらい」

宗輔「は？」

三好「なに」

宗輔「いや、約束は約束なんで」

三好「わかってるよ。で、書けたの？ 『無意味な死』は」

宗輔「はい」

宗輔、三好にノートを渡す。

宗輔「今日こそ、OKもらいますよ……」

三好「……だといけど。これで何稿目だっけ？」

宗輔「21稿ぐらいっすかね」

三好「うわあ。書いたねえ。でもおかげで少しはうまくなったかな。私も修正入れたとは言え、こないだ発表された武藤山治と永田鉄山の美談なんか良かったよ」

宗輔「ありがとうございます！ じゃあこれは……」

三好「全然ダメ」

宗輔「へ」

三好「ちゃんとしすぎ。これじゃあ意味出ちゃってるじゃろん。もう一回やり直し」

宗輔「一から？」

三好「その方が良くない？ これ適宜修正とか無理でしょ？ 構成から意味出ちゃってるし」

宗輔「でもやっぱり、総理まで務めた人間を、無意味に死なせるって言うのは……すごく無理があるって言うか」

三好「は？」

宗輔「え？」

三好「私、この美談が総理のだって言ったっけ？」

宗輔「ん？」

三好「あれ？」

宗輔「いや、聞いてないですけど、なんとなくそうなのかなって。竹田さんの様子とか見るに……」

三好「ふーん、まあそれならそれでいいや。にしてもダメ。こちらの要望は無意味な死なんだから。約束通り書いて貰えなきゃ話にならないよ」

宗輔「……先生、あんたほんとに自分の仕事、俺に継がせる気あるんすか？」

三好「ん？」

宗輔「あんた、俺に跡を継がせるのが惜しくなったんじゃないのか」

三好「なにぴりついてんの」

宗輔「だって！ おかしいだろ！ 俺はもう充分、美談作家として仕事できてる。あんたの弟子として恥ずかしくない仕事を。なのに何でダメなんだよ！」

三好「そういう約束だったから。私が納得する『無意味な死』を書き上げたら後継者にするって、はじめから言ってるよね。これはそうじゃない。だからダメだって言ってる。それだけでしょ」

宗輔「いや！ あんたは惜しくなったんだ。あんたの人生の全てを俺に奪われるのがいやになったんだ」

三好「惜しい？ 私が？ なんでよ」

宗輔「俺の方が作家として才能があるから」

三好「えーそれ本気で言ってる？」

宗輔「実際そうだろ。テレビも、ラジオも、新聞も、全部俺が書いた美談の話題で持ちきりじゃないか！ あんたのはどうだ？ もう誰もあんたの美談の話なんかしてない」

三好「そりやそうでしょ。最近書いてないもん」

宗輔「書いてないんじゃないかって、書けないんだろ？ 都合良く言い回しを変えんよ」

三好「はいはいそれで？ 書けなかったら何なのよ」

宗輔「妬ましいんだろ？ 俺が」

三好「あっはっはっは！ うける」

宗輔「いいか？ あんたにも俺にも、時間は無い。貴重な時間だよな？
くだらない遊びで浪費するのはやめようって」

三好「こっちは遊んでるつもりないんだけど。真剣に取り組んでないのは君でしょ？ 私のいってることは、はじめからかわってないよ。私が納得する『無意味な死』を書きなさい。そうしたら、私の人生を貴方にあげるって」

宗輔「……もういい」

三好「ちょっと」

宗輔「この美談は、竹田さんに持ってく」

三好「なんで」

宗輔「依頼人は総理なんだろう？ もう竹田さんから直接総理に渡して貰う。あんたが納得しなくなったら、総理本人が納得すれば仕事としてはやり遂げた事になるだろ」

三好「いやだから、私が納得しなきゃ意味ないんだって」

宗輔「いや！ 三好瞳子の依頼で総理の美談をしっかりと書き上げたってなりや、もう世間が、俺を三好瞳子の後継者として認めるだろ？ そうなったらあんた一人が何を言った所で、もー関係ないからな！」

三好「そういうもんかね」

宗輔「そうだよ！ 先生、あんた、美談を書く為に人間の欲望を理解しろって言ったよな？ 俺は生まれた時から何も持っていなかったから、この世界には欲しいものしかなかった。俺には、この世界に渦巻く欲望が手に取るようにわかる！ 何でも持っているあんたよりずっと、おれは美談作家としての才能があるんだよ！」

三好「だったらちゃんと書き上げて。期待してるね」

宗輔「だから、もう、これ以上は書かないって言ってるだろ！」

三好去る。

○13、国会議事堂(?)

竹田、悠然と現れる。軍人のような歩き方。

その様は自信に満ちて、これまでの竹田とはひと味違った様子。

宗輔「竹田さん！これ、俺が書いた総理の美談です。すみません、お渡しが遅くなっちゃって。三好先生の監修に手間取っちゃって」

竹田「は？ 何言ってるんだ、君は」

宗輔「え？」

竹田「総理の美談って、そんなものもう随分前に三好瞳子から受け取っているぞ」

宗輔「はい？」

竹田「いやいや、君が書いたんだろ？ 犬養首相、官邸にて青年将校らに射殺さる」

宗輔「え……」

竹田「丁度アレだ。君が、井上くと団くんの美談を書き上げたあとだよ。三好瞳子が私のところに持ってきてね。君がもう書き上げたからって」

宗輔「は……？」

竹田「いやなかなかの出来だったよ。」

宗輔「いや、俺はまだ……」

竹田『話せば分かる』『問答無用！』あたりの台詞回しなんか、しっかり三好イズムを引き継いでる」

宗輔「ちよつと待ってください。首相はもうなくなつたんですか？」

竹田「おいおい、君は新聞をよまんのかね。つい先日無事に命日を迎えられたぞ？ あれか、書き上げてしまった作品には興味をなくすタイプの作家かね？」

宗輔「えつと、じゃあ竹田さんは今誰の秘書を……」

竹田「おいおいそれも知らんのか。参ったなこりや。いまは陸軍大臣をやらせて貰ってる」

宗輔「はあ？ あんた軍人でしたっけ？」

竹田「君の美談のおかげで、みんなあっさり死んでしまうから、人手不足でね。いまは外務大臣と内務大臣と文部大臣と商工大臣と軍需大臣を任されているんだ」

宗輔「んな無茶な」

竹田「ほら、最近時世が不安定だろ？ 何でも1人で決められた方が、何かと話が早いんだよ。引き続きよろしく頼むよ。次は、斎藤実くんと、高橋是清くんと、渡辺錠太郎くんの美談だったよね。確かタイトルは、226事件だったかな？ 期待してるよ」

宗輔「はあ……」

竹田「いやあく感謝するよ小泉宗輔くん。君のおかげで歴史の針を十年ははやく進める事が出来た」

宗輔「俺のおかげ？」

竹田「ああ、それから、新しい仕事を君に頼もうと思ってるね」

宗輔「え？」

竹田「これから戦争を始めようというのに、野党の連中が軍事力不足を理由に反対している。なんとか奴らを黙らせたい」

宗輔「戦争？」

竹田「君の名前で、低所得者向け美談を売り出さないか。一銭五厘とかで」

宗輔「やっすい！」

竹田「葉書サイズでね。ストーリーも、まあ、廉価な美談だから、短くて単純明快なものがいいと思うんだ。『お国のために死ぬ』とか」

宗輔「ええ？」

竹田「まあ、ストーリーに関しては、こちらで適当なものを考えておくから、君は名前だけ貸してくればいいよ」

宗輔「名前だけ？」

竹田「楽でいいだろう？ 日々を無為に生きている連中にとっては、ありがたい話だろうな。たった一銭五厘で自分の人生に『お国のために死ぬ』という壮大かつ荘嚴な意味が与えられるんだから。連中、喜んで戦地に行くだろう。これで野党の連中が問題にしている軍事力不足は一気に解決するぞ？」

宗輔「美談を使って、貧乏人を戦地に送ろうって言うのか？」

竹田「どうだ、いい考えだろう？」

宗輔「どういう連中に売るつもりだ」

竹田「まずは、歌舞伎町あたりに転がっている浮浪者どもに売ろうと思ってるんだ。あいつら、ほうっておけば生産性はないし、街の景観も損ねるし、これを機に一掃できれば一石二鳥だろ？ 君、美談作家としてさらに売れるぞ？」

宗輔「ダメだ！ 貧乏人相手に商売はしないって決めてる」

竹田「なにいつてるんだ、商売つてのは貧乏人相手にした方が簡単だし儲かるぞ？ 何せあいつら、数が多いからな」

宗輔「とにかくダメだって！ 俺はそんな美談に名前は貸さないからな！ 三好先生に頼めばいいだろ？！」

竹田「三好瞳子はもう終わった作家だよ。今は君が日本一の美談作家だ」
宗輔「ええ？」

竹田「浮浪者からのし上がった美談作家。誰もが君のサクセスストーリーに共感している。今価値があるのは、三好瞳子の名前じゃない。君の名前なんだよ。やってくれるだろ？」

宗輔「いや、ダメだ」

竹田「きみ、そういう仕事を選ぶような態度はよくないよ。三好瞳子じゃないんだから」

宗輔「とにかくダメだって！」

竹田「……まいったなあ。君何か勘違いしてるんじゃないのか？ 自分の立場を」

宗輔「え？」

竹田「君に拒否する権利はないんだよ。まあ、君が人殺しだっということが公になってもいいって言うなら、これ以上は何も言わないけど」

宗輔「いや……」

竹田「三好瞳子とはつきあいが長いが、君はそうでもない。君が犯罪者になったとしても、今の私にそこまで影響はないしな」

宗輔「……」

竹田「じゃあ、頼んだよ」

宗輔「ま、待ってくれ。じゃあせめて中身を俺に書かせてくれよ。俺がちゃんと……もつとちゃんとした意味のある美談を書くから！

竹田「あー……。悪いね、実はもう売り出してるんだ」

宗輔「えっ……」

竹田、懐から赤紙を取り出す。

宗輔、それを奪い、内容を確認する。

竹田「急を要したんでね。ホラ、君たち作家にズルズル締め切りを延ばされても困るからさ」

宗輔「そんな……」

竹田「さあ、日本は変わるぞ。貧困と飢えと病に喘ぐ極東の島国が、アジアの繁栄と共生の為に立ち上がるんだ」

宗輔、駆け出していく。

○14、歌舞伎町

宗輔、歌舞伎町にやってくると、浮浪者達が宗輔の持つ赤紙に群がって来る。

宗輔「持っていない！ 俺は美談は持っていないんだ！ やめろ！ こんなもん買うな！ どうしたんだよみんな！ 美談なんかいらなかったら？ ゴミあさって、飯食って、寝て、たまにケンカして、笑う。それだけで良かったんじゃないのか？」

浮浪者達、宗輔の元からわらわらと離れて行く。

宗輔「お、おい……」

浮浪者に囲まれている閣下、格安美談「赤紙」を売りさばいている。

閣下「はい美談〜。美談いかがつすかあ」

宗輔「閣下！」

閣下「おお、宗輔！」

浮浪者達は霧散していく。

宗輔「何やってんだよ！」

閣下「宗輔、仕事だよ。役人がきてな、この美談を売りさばけって、俺に頼むんだよ！ いやあおれ仕事なんて、久々だよ」

宗輔「こんなもん売るなよ！」

閣下「お前の美談だろ？」

宗輔「違うんだって……」

閣下「だってここにほら、名前が」

宗輔「いいからやめろ！」

閣下「おい返せよ。お前が言ったんだろ？ 努力しろって」

宗輔「そうだけど！ もっとあるだろ他の仕事が」

閣下「んなもんあるか。お前そんなことも忘れちゃったのか？」

宗輔「貧乏人から金取るなって、閣下が言ったんだろ！」

閣下「貧乏人が貧乏人から取るのはいいんだよ」

宗輔「都合のいいこと言うな！」

閣下「いいだろ？ みんな喜んでるんだから」

宗輔「え？」

宗輔、閣下に促されて辺りを見回す。
あたりは熱狂に包まれている。

閣下「ホラ、みんな、美談を買って喜んで。そうだよなあ、俺たちみたいなのが美談を買える日が来るなんて、思ってもなかったもんなあ！」

宗輔「なんでだよ。こんなもの馬鹿馬鹿しいって言ったじゃねえか！」
閣下「宗輔、俺たちだって、手に入れられるものなら、生まれてきた意味がほしいよ。みんな、どうせ手に入らないだろうと諦めていただけで、無意味な人生を受け入れた訳じゃないだ」

宗輔、大衆に語りかける。

宗輔「やめろ！ みんな、こんなものは嘘なんだよ！ みんなを良いように使い捨てるための作り話なんだって！ そんなもの買ったって生きる意味なんか、手に入んねえよ！ だって、嘘なんだから！」

閣下「水を差すなって」

宗輔「全部嘘なのに……。何をこんなにはしゃいでるんだ……」

閣下「本当かどうかなんて、関係ねえからな」

宗輔「え？」

閣下「自分の人生には意味があった、それさえ信じられればいいんだ。お前だってそうじゃないか」

宗輔「は？」

閣下「喋れない妹のために、金を稼ぐ。それが、お前の生きる意味なんだから？」

宗輔「そうだけど……」

閣下「なあ？ それでいいんだよ」

宗輔「なに？ え？ 何の話？」

閣下「な？ いいんだいいんだ。お前はそれでいいんだよ。なあ、マル」

閣下、マルがいる方向とは全く別の方をみている。

宗輔「なにやってんだよ……」

閣下、宗輔に巾着袋を投げてよこす。

閣下「いらねえよそんなもん。中身全部、ただの平たい石じゃねえか」

宗輔、巾着袋をひっくり返すと、中からボロボロと石ころがこぼれ落ちてくる。

宗輔、呆然。

宗輔、ハツと辺りを見回すと、宗輔の視界にはマルの姿がない。

宗輔「マル？ ……マル！ マル！ どこだ！ マル！！」

マルが宗輔から離れていく。

それに伴って、浮浪者たちが再び現れ、さまよう。

閣下も浮浪者たちに紛れる。

宗輔、マルを探し回る。

宗輔「マル——！！！」

空襲警報が鳴り響く。

ふいに顔を上げる浮浪者たち。

警報が鳴り響く中、閣下、丸メガネをかけて、軍帽を被り、

軍服を羽織る。(浮浪者たちが着せてやる)

軍帽を被った閣下、山の上へ。

原稿取り出し、読み上げる。

閣下「今、宣戦の大詔を拝しまして、恐懼(きょうく)感激に堪えません。私、小なりといえども、一身を捧げて決死奉公、ただただ宸襟(しんきん)を安んじ奉らんとの念願のみであります。国民諸君もまた、己が身を省みず、醜(しこ)の御盾たるの光栄を同じくせらるるものと信ずるものであります。およそ勝利の要決は、必勝の信念を堅持することにあります。建国二千六百年、我等(われら)は未(いま)だかつて戦いに敗れたことを知りません」

演説に伴って、人々の熱狂高まっていく。

閣下を囲む浮浪者たち、万歳三唱。

宗輔、その様子におののき、去る。

○15、歌舞伎町

戦火に飲まれる歌舞伎町。

逃げ惑う人々。

その中を、宗輔がマルを探し回っている。

宗輔「マル！ マル！」

三好、悠然と現れる。

宗輔「先生！ マルが、マルがいなくて……！」

三好「お疲れ様！！」

宗輔「え？」

三好「よく書いたじゃない！」

宗輔「なんすか？」

三好「ありがとう！ これこそ無意味な死じゃないか！」

宗輔「ええ？」

三好「さすが。私が見込んだだけのことはある」

宗輔「なにいつてんすか」

三好「言ったでしょ？ 私の為に美談を書いてくれて。その美談で死んだとしても、それによって人生の価値が左右されない、そういう美談を書きなさいって。まさに私が望んだのは、こういうことなのよ！ ある日突然、自分の意志とは関係なく消費される大量の命。そこには、脈絡も構成もなくて、何十万とか、何百万とか、何千万っていう数字の中に、その人の名前も個性も人生も飲み込まれていく。一人一人の物語なんて読み解くことが出来ないくらい大量の死。私はね、そういう死に紛れて死んでいきかけたの」

宗輔「無意味な死って、あんたのための美談だったのか？！」

三好「正直、もう飽きた」

宗輔「え？」

三好「生まれてきた意味を考えるのに。他人のも自分のも。もーいーうんざりなんだって。散々他人の美談を書いてきて、思っちゃったんだよね。浅ましいなって。ろくでもない人生送ってきた奴が、最期だけ帳尻あわせみたいに美しく死んで、それがなんになるって言うの。それって、死を、自分の社会的評価のために利用して

るの。おぞましくない？ 私は、ただもう、意味なく死にたいのよ」

宗輔「……」

三好「小泉宗輔、あんたやったね！ ちゃんと私が納得する美談を書き上げたじゃない！」

宗輔「俺はこんな話書いてねえよ！」

三好「あんたが書いたんだよ。あんたが今まで書いてきた美談が連なつて、いま、こんなに大きな結末を迎えようとしてるじゃない」

宗輔「でもそれは竹田さんが」

三好「でもあんたが書いたんでしょ？」

宗輔「でもあんたの言うとおりに修正して……」

三好「でも、書いたのはあんたでしょ」

宗輔「……ちがう……。これは全部、あんたが書いた脚本だ。はじめから、俺は全部、あんたの思いどおりに……」

三好「……」

宗輔「こんな事、許されると思ってんのか？ 自分の理想の死に様の為に、こんな、これものすごく大変な事になってる！」

三好「許されなくてもいいの。忘れられればそれで」

宗輔「忘れられるわけないだろ？！ あんただよ！ この国の破滅の物語を書いたのは、美談作家の三好瞳子！ あんたの名前は、ずっと残るからな！ 教科書にだって載るし、毎年夏になったらNHKスペシャルで特集されるからな！！」

三好「残らない。残るのは君の名前だよ。小泉宗輔」

宗輔「え、」

三好「私はもう、終わった作家なんでしょ？ ここ最近話題になってるのは、全部小泉宗輔の美談じゃない」

宗輔「……俺じゃない。俺は望まれたとおりに書いただけで」

三好「無意味な死を書き上げた君は、私の全てを引き継ぐんだよ」

宗輔、膝をつく。

三好「ありがとう！ 美談作家の小泉宗輔！」

三好、笑顔で大きく手を振りながら炎に飲まれていく。

暗転。

○16、歌舞伎町

明転すると、舞台上の至る所に死体袋が転がっている。

男と女が、死体袋をひとつつ放り投げるところ。

宗輔、呆然とあたりを見渡している。

男「あーあ、参ったよ。これ今日中には片付けきれないなあ」

宗輔「この人たちは？」

男「しらねー。この辺にすんでたホームレス連中が多いんだろうけど、
わかんねえな。みんな真つ黒焦げで、誰が誰だか、男か女かもわか
んねえんだよ」

宗輔「この人たちはどうすんの……？」

女「身元不明者でまとめて処理します。ほら、早く次いきましようよ」

男「ああ」

女「きりないっすよほんと……」

男と女、去る。

宗輔、おずおずと遺体袋を空け、中を確認する。

宗輔「……この人、前歯に金歯が二本もある……」

宗輔、ポケットからペンを取り出し、傍にあった段ボール
の切れ端にメモを取り始める。

宗輔「……背は、そんなに高くなくて……これ、指輪だ。親指に太い奴
で……緑の石が付いている……うなじにホクロ……」

宗輔、必死でメモをとり続ける

宗輔「それから……それから……」

マルが、ゆっくりとに近寄ってきて、寄り添うように宗輔
の傍に膝をつく。

メモを取り続ける宗輔。

それを見ているマル。

そんな二人を残しながら、暗くなつてゆく(暗転)

おわり。

《参考文献》

小澤真人±NHK取材班（1997）『赤紙―男たちはこうして戦場へ送られた』創元社

喜多村理子（1999）『徴兵・戦争と民衆』吉川弘文館